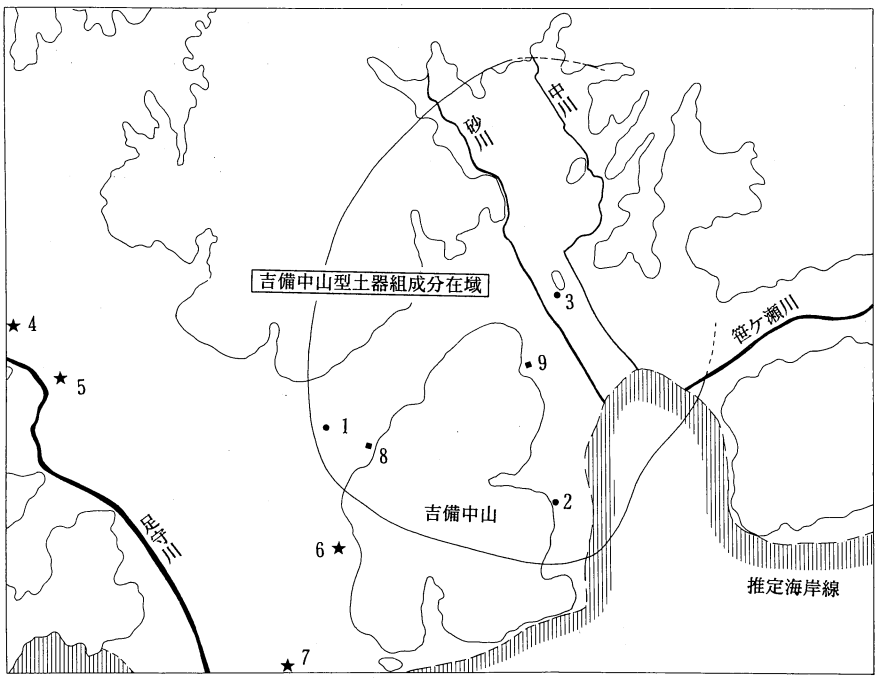
2.5～4㎝のもので、これについては底部に焼成前の穿孔が認められるものがいくつかあり、必ずしも液体を入れるものではなかったようである。口縁部の径がⅢAと同じ傾向にあることから、おそらくⅢAの台であったことが推定される。口縁部を下にして用いたのかどうかはよくわからないが、底部外面はヘラ切り後は調整をしておらず、内面はヨコナデして調整していることから、ヘラ切り痕の残る底部が下で、口縁部を上にして用いたと推定しておきたい。ⅢCは口径12～15㎝、器高3㎝前後のものである。この他高台付大皿としたものがあり、これは口径18～20㎝、器高4.5～6㎝で、断面三角形の太い高台が貼付されている。

皿のうち、ⅢAは県南部では普遍的にみられるが、ⅢBは吉井川、旭川流域ではあまりみられない。一方、高梁川流域にある石原後遺跡(12)や、足守川流域にある三手遺跡、津寺遺跡(13)などではよくみられる。ⅢBは南西部の地域色の1つといえるかもしれない。ⅢCは底部径よりも口縁部径がかなり大きいもので、吉野口遺跡以外ではあまりみられない。高台付大皿も備前国と備中国の境付近の備前国側にある小丸山遺跡(14)、天神溺遺跡(15)に分布する以外はあまりみられない器形である。

吉野口遺跡Ⅱ期の土器組成のうち、他の地域と比べ特徴的な点は、椀よりも杯が多いということと、高台付大皿という器種が伴うということである。ⅢBについては、この器形が備中国側でよくみられることから、備中国の特徴を示している可能性が高い。吉野口遺跡の西側の足守川流域に存在する三手遺跡、津寺遺跡(16)、東山遺跡(17)には椀の方が杯よりも多いといった傾向がある。一方、備前国に属するものの吉野口遺跡の西側に位置する小丸山遺跡や天神溺遺跡の様相をみると、椀と杯の割合は同じか杯の方が多い傾向が看取され、特に天神溺遺跡の土壙には椀が全く含まれていない。また、小丸山遺跡、天神溺遺跡ともに高台付大皿が認められる。これらのことから、吉野口遺跡Ⅱ期のような土器組成が、



● 吉備中山型土器組成分
★ 吉備中山型以外の土器組成
■ 主要神社

① 吉野口遺跡　④ 津寺遺跡　⑦ 川入遺跡
② 天神溺遺跡　⑤ 津寺（加茂小）遺跡　⑧ 吉備津神社
③ 小丸山遺跡　⑥ 東山遺跡　⑨ 吉備津彦神社

図271　中世土器組成別分布

備前、備中国の境周辺にある程度面的に分布する可能性が推測されてくる。仮にこれを両国の境に存在する吉備中山の周辺であることから、「吉備中山型」の土器組成と呼称すると、この分布範囲は吉野口遺跡を西端として、小丸山遺跡の位置する一宮平野を含みうる直径3～4㎞程の範囲が想定される（図271）。

中世の土師質土器については、古代末から中世において多量に廃棄されるようになることから、「邪気を祓い流し再生・復活を祈念する」ような「和様儀器」と考えられている(18)。12世紀後半以降段階的に法量が縮小していくことからも日常的な食膳具とは考えにくい(19)。したがって、「吉備中山型」の土器組成の分布する範囲が、ある種の信仰形態を共有した範囲なのか、それともある一定の土器製作者あるいは土器製作者集団からの土器供給範囲を示しているのかはよくわからないが、国という古代社会の単位に規定されずに形成された、ある種の中世的な物資の流通圏であることが推定される。つまり、「吉備中山型」土器組成の分布範囲は、「早島式土器」といわれる吉備系土師器質土器椀の分布する備前、備中、備後といったいわば大地域の中にある小単位地域の存在を示すとともに、その具体的な範囲をあらわしている事例になるものと思われる。

（2）土壙出土の杯と皿の組み合わせについて

土壙から出土した杯と皿の調整を観察すると、底部をヘラ切りしたままのものや、ヘラ切り後ナデをおこなったものなど様々である。この様相と他の遺跡から出土した資料とを比較して、底部調整の組み合わせに、何らかの傾向が看取されるかどうかについて、検討してみたい。

杯と皿の底部に残るヘラ切り痕は、中央部まで達していることから、円柱状の粘土塊上で成形した後切り離したと考えられる。しかし、その後の調整については切り離したままのものと、ヘラ切り後板状工具による圧痕（以下板状圧痕とする）を加えるものがある。板状圧痕の認められるものについては、底部内面中央部に不整方向のナデがおこなわれており、両者は一連の手法と考えられる。おそらく板状圧痕はヘラ切りの際に切り残して盛り上がった中央部分を平坦にするために叩いた痕跡で、内面のナデは板で叩いた際に当てた手、もしくは当て具の痕跡を消すためにおこなわれたと考えられる。

ところで、体部外面の稜線の有無や多寡とかいうような口縁端部の形状については、土器製作者の個人差に起因する可能性が高いと思われる。しかし、板状圧痕の有無については用いる工具の有無を示しており、このことはむしろ製作した場所（仮にこれを工房と仮称する）が異なっていたことを示している可能性が推定される。ここではこの調整の違いを指標として、杯と皿の供給される様相に他の遺跡と違いがあるのかどうかを比較してみたい。

まず、分類の基準を設定する。内面中央部に不整方向のナデが認められるものをＡとし、認められないものをＢとする。底部外面がヘラ切りのものをａ、ヘラ切り後ナデているものをｂ、ヘラ切り後板状圧痕の認められるものをｃ、ヘラ切り後ナデた後板状圧痕の認められるものをｄ、ヘラ切り後ハケ状工具による調整の認められるものをｅ、ヘラ切り後ハケ状工具による調整をおこなった後板状圧痕の認められるものをｆとする。

それでは、この基準に基づいて各土壙ごとに杯と皿の調整の集計をおこなってみた。それによると、杯についてはＡｃとＢａの組み合わせが最も多い。皿についてはＡｃ、Ｂａ、Ａｅの組み合わせが最も多く、全体的には皿と杯の傾向は似ている。しかし、各土壙ごとにみてみると（図272）、Ｐ110は杯ではＢａが最も多いが、皿になるとＡｃが多い。Ｐ94、Ｐ134、Ｐ109は杯ではＡｃが最も多いが、皿では

調整	比 率
Ａｃ	65%
Ｂａ	30%
Ａｄ	5%

Ｐ 134 杯

調整	比 率
Ｂａ	60%
Ａｃ	40%

Ｐ 134 Ⅲ

調整	比 率
Ａｃ	50%
Ａｂ	30%
Ａｄ	20%

Ｐ 80 杯

調整	比 率
Ａｅ	28%
Ａｃ	24%
Ａｆ	24%
Ｂａ	24%

Ｐ 80 Ⅲ

調整	比 率
Ｂａ	43%
Ａｃ	28%
Ａａ	13%
Ｂｂ	8%
Ａｄ	4%
Ａｂ	3%
Ｂｃ	1%

Ｐ 110 杯

調整	比 率
Ａｃ	30%
Ｂａ	22%
Ａａ	13%
Ａｂ	11%
Ａｅ	11%
Ｂｂ	5%
Ａｆ	4%
Ｂｅ	3%
Ｂｃ	1%

Ｐ 110 Ⅲ

調整	比 率
Ｂａ	62%
Ａｃ	27%
Ａａ	7%
Ａｂ	4%

Ｐ 58 杯

調整	比 率
Ｂａ	59%
Ａｃ	18%
Ａｅ	8%
Ａａ	7%
Ａｂ	5%
Ｂｅ	2%
Ａｆ	1%

Ｐ 58 Ⅲ

調整	比 率
Ａｃ	70%
Ｂａ	25%
Ｂｂ	5%

Ｐ 109 杯

調整	比 率
Ｂａ	92%
Ａｃ	8%

Ｐ 109 Ⅲ

調整	比 率
Ａｃ	55%
Ｂａ	45%

Ｐ 94 杯

調整	比 率
Ｂａ	63%
Ａｃ	37%

Ｐ 94 Ⅲ

調整	比 率
Ａｃ	57%
Ｂａ	43%

Ｐ 84 杯

図272　遺構別杯、皿、底部調整比率

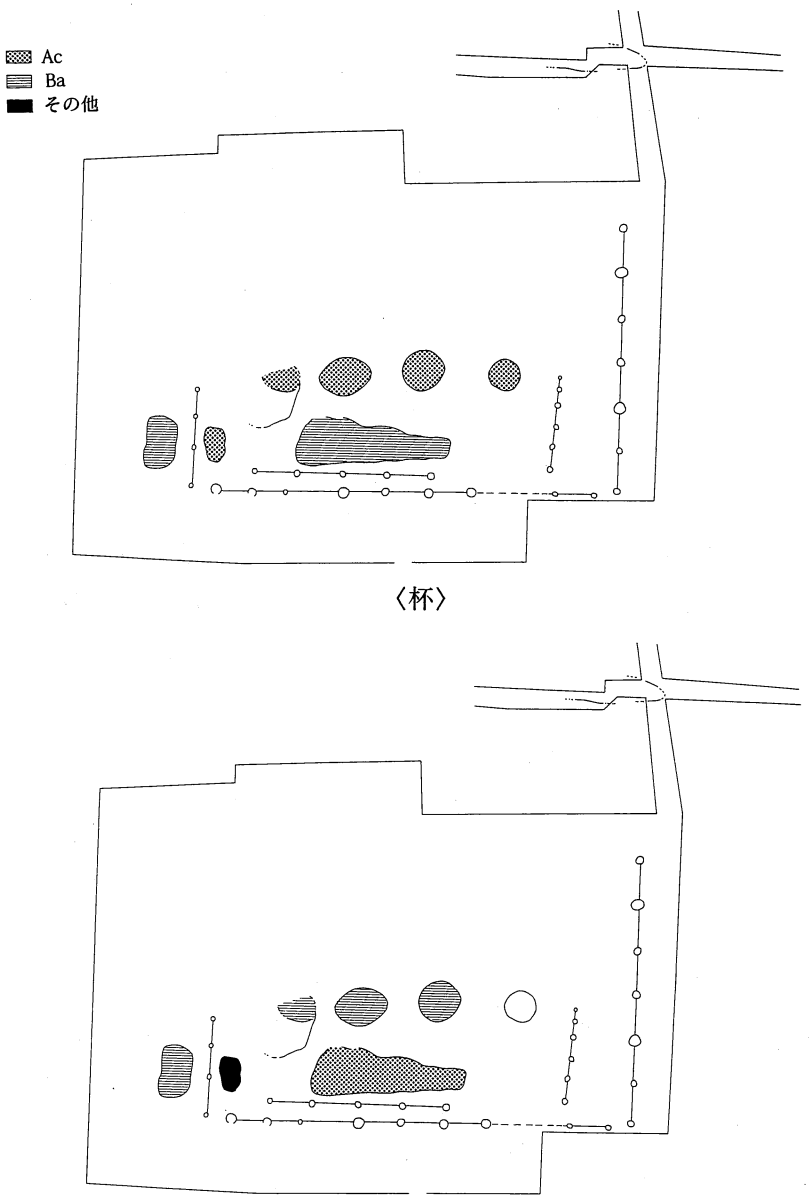


図273　土壙群出土杯、皿調整種類別分布図

Ｂａが最も多い。Ｐ80は杯ではＡｃが最も多いが、皿ではＡｅが多くなっている。Ｐ58のみは杯、皿ともＢａが最も多い。Ｐ58以外は杯と皿の最も多い調整が一致していない（図273）。

次に他の遺跡の例と比べてみたい。まず助三畑遺跡の井戸４の場合、杯はほぼ全てがＡｃ、皿もほぼ全てがＡｃである(20)。百間川当麻（米田）遺跡の井戸３と土壙159でも杯、皿ともＡｃが主体である(21)。このように極めて短期間のうちに多くの土器を廃棄した土壙の資料を見るかぎり、杯の底部調整と皿の底部調整はほぼ一致する傾向が看取される。この分類ではある程度工房の差を反映することを前提としているので、杯と皿の調整が一致することは、両者が同じ工房でつくられて供給されていることを示していると考えられる。しかもそれらの遺跡は一般集落内に存在することから、土器の多量廃棄は日常生活の一部でおこなわれたと考えられ、日常的な土器廃棄における杯、皿は大体同じ工房から供

給されていたものを用いていたと思われる。

しかし、吉野口遺跡Ⅱ期の土壙の様相は全く異なっている。杯と皿の調整の比率が一致しておらず、とくにヘラ切りのままのものと、ヘラ切りの後板状圧痕が認められるものについては、端部の形状や外面の稜の差とは違い、用いる工具の有無に関わることであるから、個人差を反映しているとは思われない。つまり、これらの土壙の様相は、複数の土器工房から集めてきている可能性を示しており、しかも杯と皿の比率が合わないことから、杯と皿がセットとなった日常的な安定した供給の結果ではなかったと考えることができるのではなかろうか。おそらく、土師質土器が大量に消費されるような饗宴をおこなう必要性が急に生じたため、日常的な土器供給範囲以上から杯、皿のセットにこだわりなく集められるだけ集めたため、各土壙にみられるような杯と皿の組み合わせになったと考えられるのである。

このような緊急かつ大規模な饗宴は、遺構の配置や遺物の出土状況からP110の首級に対しておこなわれたと思われる。頭骨に刀傷痕やかなりの破損が認められることは、激しい戦闘のおこなわれた結果と考えられ、この饗宴が戦の後に首級に対しておこなわれた鎮魂祭であったことが推測される。ただ、この饗宴が首級に対して勝者側によっておこなわれたのか、別の例えば在地の人々の手によって営まれたのかは明確ではない。しかし、かなり損傷を受けた頭骨にもかかわらず骨が散逸せずに出土していることから、斬首されて後それ程時間を経ずにP110に置かれたと考えられる（附章V参照）。つまり斬首後すぐに饗宴がおこなわれた可能性が高い。

いずれにせよ、杯と皿の底部外面の調整の組み合わせは、その遺構の性格を考える指標の１つとなるのではなかろうか。

（草原）

注

（1）斎木秀雄「墓と散乱する人骨」『よみがえる中世３　武士の都鎌倉』平凡社　1989年
　汐見一夫氏のご教示を得た。

（2）折尾学「菊池一族の首級か－御供町出土の人骨－」『よみがえる中世１　東アジアの国際都市博多』平凡社　1988年
　大庭康時「博多」『歴史読本』629　新人物往来社　1996年
　大庭康時氏のご教示を得た。

（3）岩本正二ほか『草戸千軒遺跡発掘調査報告Ⅰ』広島県草戸千軒遺跡調査研究所編　1993年
　福島政文氏のご教示を得た。

（4）朝日新聞社編『中尊寺と藤原４代－中尊寺学術調査報告Ⅰ』朝日新聞社　1950年

（5）久野修義「中世寺院と社会・国家」『日本史研究』367　1993年

（6）a　中野雅美ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　1977年
　b　福田正継ほか「百間川当麻遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46　1981年
　c　神谷正義ほか『三手（庄内幼稚園）遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団　1981年
　d　鈴木康之ほか「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　岡山大学埋蔵文化財研究センター　1988年
　e　武田恭彰「吉備系土師器椀の製作技法について」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ　1991年
　f　鈴木康之「土師質土器の成形技法に関する研究ノート」『草戸千軒』二一七　1991年
　g　山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　1992年

（7）注７と同じ

(8) 注6ｂと同じ
(9) 注6ｄと同じ
(10) 正岡睦夫ほか「三手遺跡、津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90　1994年
(11) 村上幸雄ほか「備中国府緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7　1989年
(12) 武田恭彰ほか「石原後遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』14　1995年
(13) 注10と同じ
(14) 草原孝典『小丸山（中山中）遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会　1993年
(15) 出宮徳尚ほか「天神溺遺跡発掘調査概要」『岡山市文化財年報』1　1978年
(16) 注10と同じ
(17) 乗岡実「岡山市域における最近の発掘調査成果」『古代吉備』第12集　1990年
(18) 吉岡康暢「食の文化」『岩波講座日本通史』第8巻　中世2　岩波書店　1994年
(19) 鈴木康之「かわらけとその用途」『よみがえる中世8　埋もれた港町草戸千軒・鞆・尾道』
平凡社　1994年
(20) 馬場昌一氏より資料を実見させて頂いた。
(21) 江見正己、杉山一雄氏より資料を実見させて頂いた。

Ⅵ 近世遺構面

1 遺構の構成

(1) 下 層

下層の遺構面は出土した陶磁器の年代観や、「慶長十四年」銘のある鬼瓦が出土していることから、遺構面の形成時期は17世紀初頭に下限が求められる。これらの遺構は、明治七年（1874）に鯉山小学校の敷地になったため廃寺となった道勝寺創建時のものと思われる。この時期以前の遺構面については、12世紀後半まで明確なものは確認できず、少なくとも当地に道勝寺が建立されるのは、17世紀初頭前後であったと考えることができよう。

まず遺構としては、寺域の西限を画する堀が調査区南端で検出された。南限の堀については、上層の堀と重複するため明瞭ではないが、南側の配管部分の調査区をみるかぎり近世前半の遺構は認められず、南側にも当初から寺域を画する堀が存在していたと考えられ、西側の堀は調査区の南端付近で東へ曲がると推定される。当校敷地北側には「十二ヶ郷用水」の一部である吉野用水が南北方向に流れており、おそらくこれに接続するように寺の三方には堀がめぐっていたと思われる。また、この堀の方向に即して段状遺構がある。この段状遺構は、調査区北半の寺域中心部の周囲に配されているようであり、現況の残存高で約0.5mの段差がある。段の底面からは浅い溝が検出されているが、それ以外には顕著な遺構は認められない。この段状遺構は比較的段差もあり、中心に向かって高くなるような構造であることから、城郭にみられる曲輪とよく似ている。近世初頭の一般的な寺院の調査例はあまりなく簡単に比較はできないが、周囲に堀をめぐらす点や、内部が郭状の凹凸によって構成されていることは、城郭と同じで防御的な性格を有していると考えることもできそうである。

慶長五年（1600）の関ヶ原の戦いにおいて、徳川氏の覇権が確立したといっても、慶長十四年（1609）頃は、まだまだ大阪では豊臣氏が健在であり、西国大名を中心に城郭の拡大や構築が盛んにおこなわれていた(1)。また、近世の城下町建設の際においても、寺院は防御拠点の１つとして外周部に計画的に配置されている例が多い。したがって、城下町の建設が盛んにおこなわれた近世初頭頃の寺院には、城郭に準じた構造を有していた可能性がある。つまり、道勝寺下層にみられる堀や曲輪状の遺構は、中世末から近世初頭の時期の寺院が、ある程度普遍的に備えていたものであったと思われるのである。道勝寺の面する道、すなわち山陽道から分岐する吉備津神社の参道は、国境のラインと平行しており、備前国と備中国の境を画する戦略上重要な地点であったといえる。ただ、「吉備津神社境内古図」（元禄頃）の絵図をみると、道勝寺の周辺には多くの社僧が存在していたことがわかる。それらのうち、どれだけが近世初頭から存在していたのかはわからないが、当調査区より南へ約130mの地点を調査した際にも該期の瓦が溝から出土しており、吉備津神社の参道沿いには同じような構造の寺院が近接して存在する、いわば備前国と備中国の国境を押さえる小城郭群とでも表現されるような景観を呈していたことが予想される。

天正十年（1582）の「高松城水攻合戦」の後、この地を領有した宇喜多秀家が、吉備津宮の本宮社を再建したり、本地堂を建立したりするのは一般的には秀家の吉備津宮に対する崇敬の厚さを示しているとされているが(2)、この地の性格が戦略上重要であったことにその理由の１つがあることも考えられよう。ともあれ、城郭に準ずるような堀や曲輪状遺構を有する点は、戦国末期から近世初頭の寺院のもつ特徴の１つであった可能性が推測される。

寺域内には墓地も形成されていて、調査区内では3基検出された。これらの墓は西側の堀に沿って1列に並んでおり、寺に伴ういわゆる寺墓であることは確実である。個々の構造をみてみると全て土葬であるが、上部に積み石が認められるものとそうでないものとがある。また積み石には、方形に囲んでいるものと頂部に石を積み重ねているものとがある。これらの墓壙の堀り方の平面形は方形で、埋葬法は横臥屈葬である。積み石の存在するものは、石が墓壙内にそれ程落ち込んでいないことから、若干墳丘が存在していたと思われる。一方積み石がないものは墓壙の堀り方の平面形は円形で、埋葬法は座葬である。

比較的細かな時期差までとらえられた近世墓地の発掘成果をみると、墓壙の平面形や埋葬法は前者から後者へ変遷している例が多いようである(3)。室町時代から江戸時代にかけての墓地群の構成を明らかにした広島県妙音寺原遺跡(4)の例でも、室町時代中期前後の墓については上部に積み石基壇をもち、それが時期が下るにしたがい序々に簡易化され、江戸時代になるとさらに省略されるようになる。岡山県上房郡賀陽町大村遺跡(5)の中近世墓の調査成果でも、時期が下がるにしたがい墓壙上部の積み石が簡略化されていく。これらのことから中世墓は、それぞれの地域や埋葬者の階層などによって細部の形態は様々であるが、近世になると墓壙上部の積み石が簡略化、もしくは省略されていく傾向は共通しているようである。

道勝寺の寺墓に副葬された六道銭をみると、寛永通寶が含まれていない。墓への副葬も含めて渡来銭から寛永通寶への流通の移行は、急激におこなわれたことが指摘されており(6)、今回検出された道勝寺の寺墓は、寛永通寶の初鋳年代（1636年）よりも溯る時期であったと考えてよい。したがってこれらの墓の形成は、道勝寺の創建時期と極めて近接した時期であった可能性が高いといえよう。しかし道勝寺の寺墓のうち、墓壙上部に積み石がなく掘り方の平面形が円形のものには、埋土の中に道勝寺創建時の所用瓦が含まれており、この墓の形成が寺の建立からある程度時間が経過して掘られたことを示していると考えることもできよう。一方、掘り方の平面形が方形のものについては、埋土に瓦は含まれていなかった。これらのことは、平面形が円形のものよりも方形の方が古いことを示していると思われ、今回検出した道勝寺の寺墓は17世紀前半に形成され、その中でも方形の掘り方で上部に積み石をもつものから、円形の掘り方で上部に積み石をもたないものへと形態が変化したことが推定される。

道勝寺の寺墓にみられる以上のような変遷は、中世墓から近世墓にみられる一般的な変化のパターンとも共通している。

道勝寺の寺墓は規則的に並んでいる。近世の寺墓である東京都圓應寺の発掘調査の成果(7)をみると、墓地の構成はA、Bの2群に分かれる。A区の墓群は墓道と考えられる空白域を介して規則的に並んでいるのに対して、B区は不規則に密集している。副葬品についてもA区については豊富であるが、B区についてはほとんどない。被葬者の性別や年齢についても、A区は男女の比率に大きな隔たりはなく幼児も含まれているのに対し、B区では男性の比率が圧倒的に多く幼児は含まれていない。A区は男女比もバランスがとれており、追善供養を可能とする墓道が想定されることから、この寺の檀家とみられる。一方B区については、寺との関係は一過性で、非檀家のものとされる。この事例は江戸という都市部の様相であり、地方における例とすぐに比較することはできないが、今回検出された道勝寺の寺墓は規則的に並んでおり、圓應寺A区の墓群と似ている。また、この墓群と近接する堀から追善供養をおこなったことを記した木簡や、追善供養に用いられることの多い木製卒塔婆が出土しており、このことはこれらの墓群に対して追善供養がおこなわれたことを示していると考えてよいであろう。したがって、これ

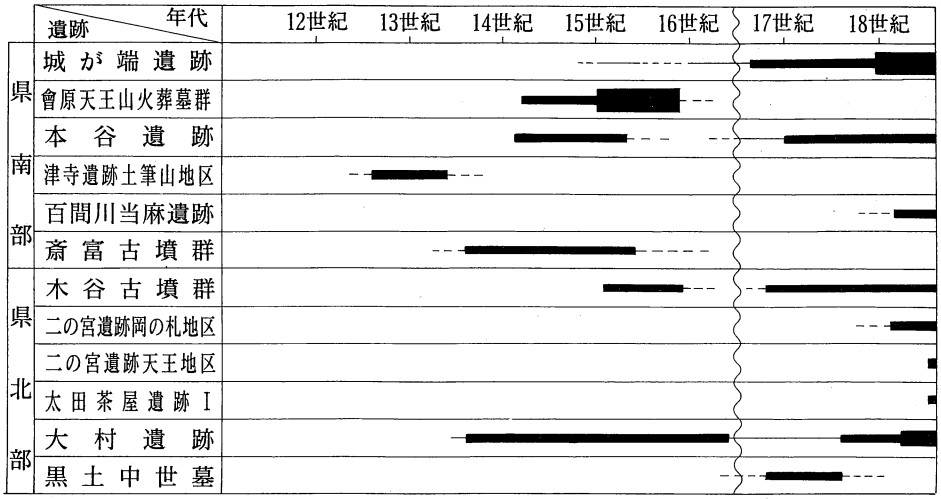
らの墓群は道勝寺の檀家か、もしくは住職の墓というような寺と継続的な関係を有していた人々のものである可能性が考えられよう。

それでは、近世初頭に寺で追善供養をおこなったということについて若干考えてみたい。室町時代以降、相次ぐ戦乱により死というものが日常よくみられる光景となった。その死に対する畏怖を少しでも緩和するために、死者に対する供養が頻繁におこなわれるようになったと考えられている。それまでも仏教における作善、積善の１つとして、死者に対する供養はおこなわれていたが、それはある特定の上部階層にかぎられていた(8)。供養の具体的な形態は、石塔や塔の造立に示される。このうち、石塔に記された刻銘の内容から、供養する主体者は貴族や武士、あるいは村落の名主層を中心とした講的結合などであった。しかし、室町時代後半になると、農業生産の向上により造塔階層が拡大していく。各部別石造の五輪塔の中から小型化、簡略化して、より大量生産を指向する一石五輪塔がこの時期に出現するのも、拡大した造塔階層の需要に応じるものであったと考えられる(9)。石塔については刻銘のないものはよくわからないが、供養塔と墓標との違いがあり、室町時代後半に岡山市日応寺の一石五輪塔群や、英田郡大原町の五輪塔群などにみられる小形の石塔群の存在は、造塔階層が爆発的に増加したことを示しており、この中には追善供養を目的として造立されたものも多数含まれていると思われる。

石塔の造立以外に、追善供養のおこなわれたことを示すものがある。それは木製卒塔婆で、中世遺跡の発掘調査が増加するに従い出土例も増えつつある。『七十一番職人歌合』に描かれた「いたか」といわれる僧が売っている笹塔婆が、この木製卒塔婆に相当するとされる(10)。木製卒塔婆は、発掘調査において大半が河川や溝から出土している。県下でも邑久郡邑久町助三畑遺跡の溝から応永三十□年（1423～1427）銘の墨書のあるものが(11)、また岡山市百間川米田遺跡の14～16世紀の溝からは３本が出土している(12)。これらの木製卒塔婆は、室町時代に文献によく出てくる「流水灌頂」や流し塔婆とよばれた供養儀礼に用いられ、結果として河川などに流されたものとされる(13)。石塔よりもはるかに手に入れやすいと思われる木製卒塔婆を用いた供養儀礼の普及は、石塔の造塔階層の拡大と同じ意味があると思われる。ただ、ここで注目したいのは、室町時代においてその供養が特定の場所でなく、河川などでおこなわれたと思われる例が多いということである。

ところが道勝寺の場合、寺という限定された空間内に葬地があり、それらに対する追善供養も木簡や木製卒塔婆、一石五輪塔の出土などから同寺内でおこなわれていたと考えられる。岡山市日応寺には、一石五輪塔が50基以上も群をなしている。石材は溝14下層から出土した一石五輪塔と同じですべて凝灰岩（豊島石）製であり、形態も溝14下層から出土したものとよく似ている。これらが全て供養塔であるとはいいきれないかもしれないが、道勝寺下層のように寺内で追善供養がおこなわれた結果造立されたものも少なくないと思われ、室町時代後半には、寺内で追善供養をすることがある程度普遍化されてきていたと考えることができるのではなかろうか。

江戸時代になると、幕府による宗教統制がおこなわれた。仏教諸宗派は１つの枠組みにはめ込まれ、封建体制機構の末端に組み込まれていった。具体的な施策としては、慶長から元和期（1613～1616）の寺院法度の制定と、寛永９、10年（1632、1633）の寺院本末帳の作成である。寺院法度、寺院本末帳の作成により諸宗派の本山、本寺の権限は末寺に対して大幅に認められ、本山、本寺による末寺の統制がはかられたが、一方で中世以来の寺領を取り上げられ、宗教活動の枠組みでしかその機能を発揮できなくなり、それまで寺院のもっていた政治力は大幅に削減されていった。そして、幕府により統制された寺にキリシタンの摘発を請け負わせたのが寺請制度である。それは、人ひとりに必ず檀那寺を決めさせ、



文 献
① 間壁葭子「倉敷市城が端遺跡」『倉敷考古館研究集報』第18号 1984年
② 伊藤晃ほか 「曾原」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』36 1980年
③ 綱本善光ほか 「本谷遺跡」『笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告』1 1987年
④ 正岡睦夫ほか 「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年
⑤ 井上弘ほか 「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 1982年
⑥ 福田正継ほか 「斎富古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 1995年
⑦ 福田正継ほか 「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93 1995年
⑧ 高畑知功ほか 「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』28 1979年
⑨ 岡本寛久ほか 「大田茶屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』96 1994年
⑩ 江見正己ほか 「大村遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』113 1996年
⑪ 弘田和司ほか 「黒土中世墓」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111 1996年

図274 岡山県下における中・近世墓群の消長

その人がキリシタンでないことを証明させた制度で、全国的に庶民にいたるまで実施されたのは寛永12年（1635）頃とされる。この制度により、檀那寺は檀家の戸籍上の動態や旅行などの小さな動きさえも把握し、葬式や供養を独占しておこなうことが公的に保証され、檀家からの安定した収奪を可能とした。しかし、寺請制度は寺が幕府の統制下にあることから、これも幕府による民衆支配の制度の１つと考えられる(14)。

室町時代から江戸時代初頭頃の寺と庶民との関係を具体的に示す発掘例は多くないが、鎌倉時代以降連綿と墓が築かれている遺跡でも、中世末から近世初頭の時期に断絶、もしくは急激に衰退するか、あるいは該期以降活発な造墓活動が認められる例がかなりある（図274）。丘陵部に13世紀後半から連綿と墓地が形成されている静岡県磐田市一の谷遺跡(15)でも、17世紀ぐらいに造墓活動が停止している。これは、墓地の形成が都市部内へ移動したためと考えられている。おそらく、道勝寺のような檀那寺へ墓地が移動したものと思われる。そして寺内へ墓地が形成されるのは、ただ葬地を寺内にしたというのだけではなく、それ以降の追善供養も葬地の寺によっておこなわれるようになったと考えられ、寺と庶民層と思われる埋葬者との関係がより強固で継続的なものになったことを示している。それは、現象的にはそれまで分散的におこなわれていた追善供養を集約化したことであるが、本質的には戦乱が鎮静化し、そのため治水事業の進展に起因する農業生産の向上があり、庶民層の定住化が保障されるといった背景がなければ達成されなかったことであると考えられる。

つまり16世紀から17世紀初頭にかけては、江戸時代における寺と檀家との関係に近い形態が在地において形成されつつあったと考えることができそうで、その関係を利用して幕府が寺請制度を実体化した

ことが推定される。

ともあれ、道勝寺下層の様相は中世から近世への変換点にある墓制の一端を示していると考えられよう。そして道勝寺の寺の形態は、石田茂作氏の設定した中、近世寺院の伽藍類型のうち、基本的には墓地を内包した檀越寺院伽藍配置であったと思われるが、当初は防御的施設も備えた城郭寺院伽藍配置の性格も具備しているといえる(16)。

(2) 上 層

上層の遺構は下層の堀や段状遺構を埋めて形成されており、寺域の拡張があったことを推定させる。時期は溝14上層から出土した陶磁器などから、18世紀中頃前後と考えられる。鯉山小学校の敷地に接して立地する「妹尾太郎兼康公墓」とされる宝篋印塔の正面には石柱が立てられており、それには「(表面) 当寺けい内にせ乃太郎か禰や寸のは可志よあり　道勝寺」「(裏面) 安永八年十一月建立　本寺現住瑞雄」と刻まれている。これはいわゆる当時の観光案内板のようなものであり、ここに刻まれている年代は上層の形成時期とほぼ一致している。おそらくこの年代頃に道勝寺の寺域が拡張され、「妹尾太郎兼康公墓」の周辺も現在みられる石垣状の基壇を積んで、石製の玉垣をめぐらすような整備がなされたのであろう。

また南側の堀についても、素掘りの堀であったものが花崗岩の切石を用いた石垣になっている。石垣の石材は小学校造成の際にほとんどが抜かれているが、残存した部分をみると溝の底面に基礎をつくらずじかに石材を置き、背後に拳大の角礫を栗石として充填している。溝上面と残存している石材の高さの関係から、本来の石垣は少なくとも2～3段は存在していたと思われる。

遺物の量は下層と比べてかなり増えている。下層は陶磁器などの出土はわずかであったが、上層になると伊万里系の陶磁器を中心とした雑器が多量に出土しており、それらを廃棄したゴミ穴もいくつか検出されている。このことは、寺域が日常の生活空間として積極的に利用されていたことを示しているのと、江戸時代前期と比べ在地における陶磁器の流通パターンが変化したことを反映させていると思われる。

いずれにせよ、18世紀中頃に道勝寺における1つの画期が設定できそうである。

2　道勝寺に関する史料について

調査地である鯉山小学校の敷地となる以前に当地に存在した道勝寺は、「治承・寿永の内乱」、いわゆる「源平の争乱」の時に平家方の武将として戦い、木曽義仲の軍勢に討たれた妹尾（瀬尾）太郎兼康の首級を埋め菩提を弔うために建立されたといわれている。江戸時代末から明治時代にかけて編纂された『備中誌』にも同じ内容が記されているが、この作者は道勝寺と兼康との関係については否定的である。しかし、少なくとも江戸時代の終わり頃には道勝寺が兼康の菩提寺として建立されたという説話は一般的に流布されていたと考えられる。また、江戸時代末頃には道勝寺は無住になっており、18世紀中頃の寺域拡張後、序々に衰退していったと思われる。

道勝寺の出てくる文献は「吉備津神社文書」の中に4点ある。最も古いのは天正十一年（1583）の「道勝寺頼信屋敷賣券」で、道勝寺の僧である頼信が屋敷地を慈觀寺へ売却したことを記している。売却した屋敷地の位置はよくわからないが、四至のうち「南ハ限大道ヲ」となっていることから、付近を通る大道といえば山陽道しかなく、おそらく山陽道の北側に位置したのではなかろうか。この屋敷地が

どういった経緯で道勝寺のものとなっていったのかについては、この史料からだけではよくわからない。しかしこの史料から、1583年頃には道勝寺が建立されていたことは確実であり、今回の発掘調査で下層遺構面から出土した陶磁器は17世紀初頭が中心であったが、この史料から下層遺構面の上限年代をもう少し繰り上げて16世紀後半と考えた方がよい可能性がある。

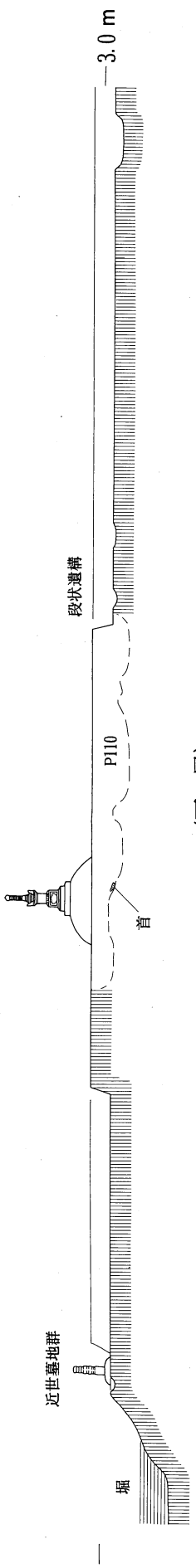
他の3点は、貞享五年（1688）の「幕府寺社奉行裁許状」と、享保十七年（1732）「社家頭五名連署窺書寫」と、元文二年（1737）の「普賢院眞鐐請文」で、いずれも吉備津神社内の三重塔が社家により破却されたことに端を発した吉備津宮と普賢院を中心とした寺院との争いについてのもので、道勝寺は普賢院の末寺として連署してある。

道勝寺を建立した契機となったとされる妹尾（瀬尾）太郎兼康は、平家方の武将という側面とは別に、治水をおこなった地元の功労者という伝承もある。それは高梁川から直接取水し、現在の総社市東半と岡山市西半の広大な範囲を灌漑する「十二ヶ郷用水」の開削および整備をおこなったということである。「十二ヶ郷用水」を詳細に研究した成果によると、この用水は足守川を境にそれより西側を上郷、東側を下郷としているが、「太平記」の記述のなかでは下郷にあたる板倉川がまだ河道として存在していることから、下郷部分についてはそれ以降に用水路化されたと考えられている。したがって現在のような「十二ヶ郷用水」が成立するのは室町時代の後半以降で、その存在を示す最も古い史料が天正十二年（1584）の宇喜多秀家の新田開発に関する書状であることから、少なくとも16世紀後半には成立していたと考えられよう。また特筆されることとして、この用水は史料で確認されるかぎり、農民による自治的な管理運営がなされていたということである。

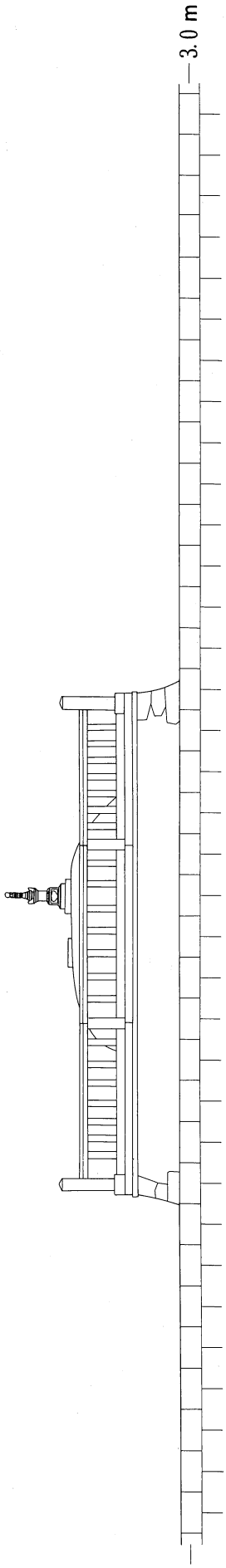
「十二ヶ郷用水」と兼康との関係を記した最も古い文献は「備中国賀陽郡湛井川用水水掛リ之事」で、慶長十七年（1612）のものである。「十二ヶ郷用水」が完成したと推定される時期、「十二ヶ郷用水」と兼康との関係を記した最も古い文献の時期、兼康の菩提寺とされる道勝寺の建立時期、この三者には微妙な時期差はあるものの、いずれも16世紀末から17世紀初頭の時期を示している。このことは、それらの成立には有機的な関係が存在したことを推測させられる。おそらく現在みられるような「十二ヶ郷用水」は、基本的に農民による共同開発、共同運営であったため、その求心力となる精神的支柱、あるいは外権力の介在を排除する理由の1つとして、その当時でも在地に根強い治水伝承が流布されていた兼康をもち出してきたのではなかろうか。そして兼康と「十二ヶ郷用水」との関係が成立した結果の延長に、兼康の菩提寺としての道勝寺の建立があったのではなかろうか。したがって、「十二ヶ郷用水」の完成→兼康伝承の成立→道勝寺の建立は、16世紀末から17世紀初頭におこなわれた「十二ヶ郷用水」の運営に関わる一連のものであったと推測されるのである。ただ、道勝寺の当地への建立については、兼康に関する何らかの伝承が建立以前からあった可能性はあり、兼康の供養塔とされる宝篋印塔が他の場所から移動されてきていないとするならば、この塔に関するものであった可能性があると思われる。

3　伝妹尾（瀬尾）太郎兼康供養塔の景観復元

鯉山小学校の敷地に接して妹尾（瀬尾）太郎兼康の供養塔とされる宝篋印塔が1基ある（図5）。この宝篋印塔は石垣状の基壇の中央にあり、周囲には石製の玉垣をめぐらしている。藤井駿氏の鯉山小学校区の歴史について説明した講演記録をみると(17)、鯉山小学校をつくった際に（明治7年）、妹尾（瀬尾）太郎兼康供養塔とされる宝篋印塔（以下宝篋印塔とする）を現在の場所へ移動させたとことが述べられている。地元でも宝篋印塔を移動させたことを古老から聞いたことがあるという人がおり、さらに



〈下 層〉



〈上 層〉

図 275 近世道勝寺景観復原図（南から）

本来の場所は調査地の辺りであったということである。宝篋印塔が本来は今回の調査地上に存在していたのかどうかについては、そのことを示す確実な資料がなく、実際にみた人も存命していないためよくわからないが、現宝篋印塔は道勝寺境内の別の場所から移動されてきた可能性はありそうである。そこで、今回検出した道勝寺境内の遺構を検討し、本来宝篋印塔が存在していた可能性のある地点の景観を復元してみたいと思う。

道勝寺下層の遺構面には、調査区南半に段状に削り出した「凸」字形に張り出す部分がある。その部分には同期の遺構は認められず、また上層の面についても同様である。段状遺構については、本堂の存在した寺域中央部を中心にめぐる形態であったと推定し、城郭の曲輪と同じ性格のものであると考えたが、張り出し部分の性格についてはよくわからない。この部分に遺構が検出されないことから、南から寺へ入る陸橋か、あるいは遺構として残存しないような構造物の基壇の可能性が考えられないであろうか。後者であったと仮定すると、１つの復原案としてこの部分に宝篋印塔が存在していたということが考えられる。現在みられる石垣状の基壇や石製の玉垣は、上層に属する時期に付属されたと考えられることから、下層の宝篋印塔は現況の塔下部にある塚状の高まりの上に立っていたと想定される。そしてその位置は、「凸」字形に張り出した部分の先端である可能性が考えられ、その西側の１段低い位置に近世墓が並んでいるというのが下層の景観であったと推測されるのである（図275）。

そして上層になると、下層のように宝篋印塔の周囲に段差はなくなるものの、積み石基壇をつくり下層と同じように周辺よりも１段高くし、その上部に塚状の高まりと宝篋印塔を移動させ、周囲に石製の玉垣をめぐらすようになった（図275）、という景観が復原される。したがって現況の宝篋印塔は、上層のものをそのまま移動させたということになろうか。

ただ、宝篋印塔が本来存在していたと予想した地点には、その下部に12世紀末の時期に斬首されたと推定される頭骨を出土したＰ110が存在している。Ｐ110が後の時期の削平をほとんど受けていないことや、本来宝篋印塔が存在したと予想される位置と重なることから、道勝寺建立以前からこの地点に何らかの構造物があった可能性がある。宝篋印塔の時期はその形態から14世紀頃と考えられており(18)、道勝寺建立以前から当地点にこの宝篋印塔が存在していたとしても、それとＰ110の時期とでは100年以上の差がある。宝篋印塔が建てられる以前にもＰ110の上面には塚状の高まりなどの標示物が存在していた可能性も考えられよう。

4　妹尾（瀬尾）太郎兼康と伝妹尾（瀬尾）太郎兼康供養塔の関係について

妹尾（瀬尾）太郎兼康（以下兼康とする）は『平治物語』、『平家物語』、『源平盛衰記』などの軍記物語に登場するものの、確実な史料は残存していない。したがって、まずその実在性から追及していかなければならない人物であるといえる。

ただ、『平家物語』、『源平盛衰記』では兼康の最期について１章が設定されていること、他の部分でも度々物語の中に登場していること、兼康に関する伝承が地元でかなり流布されていることなどから、ある程度実体のある人物としてとらえることもできると思われる。また『吾妻鏡』に、いわゆる「曾我兄弟の敵討ち」の際に巻き込まれて死亡した備前吉備津宮の王藤内が、鎌倉方の囚人となった理由を「平家の家人瀬尾太郎兼保に與する」ことによってと記されており、間接的ではあるが兼康のことにふれた記事であるといえる。ここでは、兼康の菩提を弔うために建立されたといわれている道勝寺の境内を調査したということや、さらに調査地点が伝妹尾（瀬尾）太郎兼康供養塔の本来の位置である可能性

もあることから、兼康が木曽義仲の軍勢に討たれる部分を中心に若干整理し、兼康と当遺跡との関係を確認しておきたい。

『平家物語』、『源平盛衰記』によると、兼康は備中国を基盤とした平家方の武将で、「南都焼き討ち」や「鹿ヶ谷事件」の主謀者の一人である大納言藤原成親の配流と殺害などに関わるような、いわば清盛の側近的な存在であったことがうかがわれる。しかし、寿永二年（1183）の対木曽義仲との戦である「倶利加羅峠の戦い」で木曽方の捕虜となり、「水島合戦」の後に木曽義仲が中国地方へ進撃する際に同道させられたが、途中で裏切り木曽義仲の部下を殺害して逃亡した。その後、備前国福隆寺畷で木曽義仲の軍勢と合戦になるものの、敗れてさらに西の備中国板倉川のほとりに楯を立てているか、もしくは板倉城に立てこもって木曽勢を迎え撃ったが敗れて、最後まで残った嫡子の小太郎宗康、郎等の主従3人は討たれて首級を備中国鷺ヶ森にかけられたという。この一連の物語の中には兼康の菩提を弔う説話などはなく、ただ最後の合戦が道勝寺のある板倉付近でおこなわれたということだけである。首級のさらされた鷺ヶ森という地名についても特別な地名でないため諸説あるものの、その位置を明確に比定することはできない。したがって道勝寺と兼康との関係、あるいは伝妹尾（瀬尾）太郎兼康供養塔と兼康との関係については『平家物語』、『源平盛衰記』とは基本的には関係なく、地元で流布された伝承であったと考えられる。

ただ、今回検出した遺構をみると、兼康とほぼ同じ時期と推定される12世紀末の遺構面があり、その遺構面の中央にある土師質土器を多量に出土した最も大きな土壙から熟年男性の頭骨が出土しており、その頭骨には刀傷や人為的な破損の痕跡が顕著に認められることから、合戦などの非日常的な出来事の結果斬首されたとも考えられなくもなさそうである（附章Ⅲ参照）。また、この遺構面は柵列とそれに囲まれ規則的に並ぶ土壙群で構成されており、それぞれの土壙の中には土師質土器が多量に投棄されているものも多い。これらの遺構配置や遺物の出土状況は、一般的な集落の様相とは異なっており、その配置から出土した頭骨に対しておこなわれた饗宴に関する遺構であると推定される（第Ⅴ章Ⅴ参照）。さらに頭骨の出土した土壙は、後の時期の遺構に削平されることもなく、また少なくとも近世には伝妹尾（瀬尾）太郎兼康供養塔が立てられていた土壙の下部に相当することが推定されることから、土壙が埋没した当初から塚状の標示物が遺構上面に存在したと推測される。つまり出土した頭骨は、斬首された直後に饗宴などの鎮魂供養がおこなわれ、さらにその後も塚を築いて崇拝された形跡があると思われるのである。

斬首された首級に対して饗宴などの特別な鎮魂供養がおこなわれた例はあまりなく、奥州藤原氏の4代目当主である藤原泰衡の首級が中尊寺金色堂に納められているのが、唯一の例である。おそらく斬首された首級に対して鎮魂供養がおこなわれる場合は、生前かなりの立場の人物であった可能性が高いと思われる。特に兼康については、在地豪族で平家方の武将という立場の他に、不思議な霊力を具備していることを記した箇所が『平家物語』にいくつか認められる。したがってその死に対しても、生前の立場以上に兼康の霊に対する鎮魂が必要であったのではなかろうか。ただ当時の鎮魂儀礼が、具体的にどのようにおこなわれたのかはよくわからないが、当調査区で検出された土壙群に廃棄された、多量の土師質土器から推測される大規模な饗宴であった可能性もあると思われる。

以上のように今回検出した12世紀末の遺構面と、そこから出土した頭骨とは、時期的な点や兼康に関する伝承ともかなり符号するようにみえる。しかしさらし首となった首級には、姓名、年齢、年月日を書いた首札（首簡）といわれる薄い木の板がつけられることになっており(19)、この板が頭骨とともに

出土していない以上、出土した頭骨と兼康の関係を追及することはできない。ただ頭骨を出土した土壙の上面には、塚状の標示物が存在し、後世にはその上に宝篋印塔が立てられたと推定復原されることから、現況の伝妹尾（瀬尾）太郎兼康供養塔は、結果としてこの頭骨に対して立てられた可能性が高いと思われる。

（草原）

注

（1）小和田哲男『城と城下町』教育社　1979年
（2）藤井駿『吉備津神社』日本文教社　1973年
（3）長佐古直也「発掘事例にみる多摩丘陵の墓制」『江戸時代の墓と葬制〔発表要旨〕』江戸遺跡研究会　1996年
（4）広島県教育委員会「妙音寺原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（4）　1983年
（5）江見正己ほか「大村遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』113 1996年
（6）鈴木公雄「渡来銭から古寛永通寶へ－出土六道銭からみた近世前期銭貨流通史の復元」『論苑考古学』天山舎　1993年
（7）新宿区厚生部遺跡調査会『圓鷹寺－新宿区立若葉高齢者住宅サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書』　1993年
　　栩木真「寺院と墓地－江戸の中小寺院」『季刊考古学』第53号　雄山閣　1995年
（8）水藤真『中世の葬送、墓制－石塔を造立すること』吉川弘文館　1991年
（9）藤澤典彦「墓塔、墓標」『日本考古学を学ぶ（中)』有斐閣　1986年
（10）佐々木孝正「流灌頂と民俗」『講座日本の民俗宗教二　仏教民俗学』弘文堂　1980年
（11）馬場昌一「岡山・助三畑遺跡」『木簡研究』第5号　1983年
（12）岡本寛久ほか「百間川米田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989年
（13）西本安秀「中世遺跡出土の木製卒塔婆について」『考古学論叢』関西大学　1993年
（14）芳賀登「葬儀の歴史」雄山閣　1980年
　　圭室文雄『日本仏教史　近世』吉川弘文館　1987年
（15）山崎克己「一の谷中世墳墓群遺跡とその周辺」『中世社会と墳墓』名著出版　1993年
（16）石田茂作『仏教考古学論攷』一寺院編　1978年
（17）鯉山小学校「学区内文化財の研修－岡山大学名誉教授藤井駿先生をお迎えして」
（18）根木修『仏像保存修理報告書』岡山市遺跡調査団　1978年
（19）小松茂美「後三年合戦絵詞」『日本の絵巻』14　中央公論社　1988年

参考文献

巌津政右衛門『岡山の石造美術』日本文教出版　1973年
佐々木潤之介「大名と百姓」『日本の歴史』15　中公文庫　1974年
田中久夫「文献にあらわれた墓地－平安時代の京都を中心として－」『日本古代文化の探求墓地』社会思想社　1975年
高橋康夫・吉田伸之『日本都市史入門Ⅰ　空間』東京大学出版会　1989年
石井進・萩原三雄編『中世社会と墳墓』名著出版　1993年
勝田至「さまざま死」『岩波講座日本通史』第8巻中世2　岩波書店　1994年

Ⅰ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析

古環境研究所

1．はじめに

植物珪酸体は植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石を遺跡土壌などから検出し、同定および定量する方法を植物珪酸体（プラント・オパール）分析法とよんでいる（藤原 1976）。本章では、同分析を用いて、吉野口遺跡におけるイネ科栽培植物の検討、および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

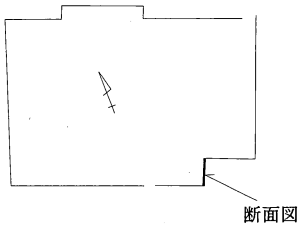


図１　断面図位置

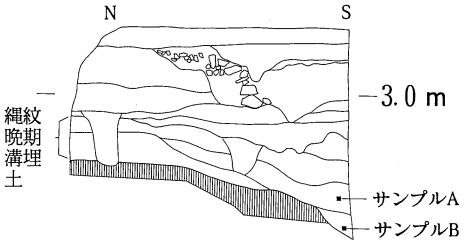


図２　土壌サンプルの位置
（S＝1／80）

2．試料

試料は、縄紋時代晩期の溝埋土から試料ＡとＢ（図１、２）、竪穴住居14埋土内から試料Ｃが採取された。また、縄紋時代晩期の土器胎土についても分析を行った。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原 1976）」をもとに、次の手順で行った。なお、土器片については前処理として土器片のコア（中心部分）を抽出し、24時間水浸の後に乳鉢等を用いて細粒化したものを分析試料とした。

（１）試料の絶乾（105℃・24時間）
（２）試料約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm,約0.02ｇ）
　　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量
（３）電気炉灰化法による脱有機物処理
（４）超音波による分散（300w・42kHz　・10分間）
（５）沈底法による微粒子（20μm以下）除去，乾燥
（６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
（７）検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400～500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

4．分析結果

各試料から検出された植物珪酸体の分類群と検出個数を表１に示す。なお、稲作の検討が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる），キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な５分類群に限定した。また、各分類群の顕微鏡写真を示す。

5．考察

（１）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、キビ族（ヒエやアワなどが含まれる）やムギ類、トウモロコシ属、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがある。

イネは、縄紋時代晩期の溝底部付近の堆積物（試料ＡとＢ）から検出された。縄紋時代晩期の溝底部付近の堆積物では、溝底部直上の試料Ｂで2,100個／ｇ、その上位の試料Ａで1,500個／ｇといずれも比較的低い密度である。しかし、下位の試料Ｂの方が上位の試料Ａよりも密度がやや高いことから、上層から後代の植物珪酸体が混入した危険性は考えにくい。これらのことから、当遺跡では縄紋時代晩期には周辺で稲作が行われており、そこからなんらかの形で溝内にイネの植物珪酸体が混入したものと推定される。

なお、縄紋時代晩期の土器胎土からは、栽培種に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

（２）古植生・古環境の推定

縄紋時代晩期の溝底部付近の堆積物から、タケ亜科（おもにネザサ節）やヨシ属などが検出された。このことから、当時の遺跡周辺はヨシ属やネザサ節が生育するイネ科植生であったものと推定される。

6．まとめ

以上のように、縄紋時代晩期とされる試料からはイネの植物珪酸体が検出され、これらの時期に当遺跡もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。なお、縄紋時代晩期の土器胎土からは、栽培種に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

参考紋献

杉山真二．１９８７．タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号：70-83.

藤原宏志．１９７６．プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9:15－29.

藤原宏志．１９７９．プラント・オパール分析法の基礎的研究（３）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativa L.)生産総量の推定－．考古学と自然科学，12:29－41.

藤原宏志・杉山真二．１９８４．プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17:73-85.

表１－１　岡山市、吉野口遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果

（単位：×100 個／g）

分類群	土器胎土 A	土器胎土 B
イネ科		
サヤヌカグサ属		6
ヨシ属	19	
不明Aタイプ（キビ族類似）	12	
不明Bタイプ（ウシクサ族類似）	56	6
不明Cタイプ	19	6
表皮毛起源	6	18
茎部起源	6	
棒状珪酸体	19	42
その他	206	90
タケ亜科		
ＡＩａタイプ（ネザサ節など）		6
ＢＩタイプ（クマザサ属など）	6	
その他		6
植物珪酸体総数	349	179

表１－２　吉野口遺跡における主な分類群の検出結果

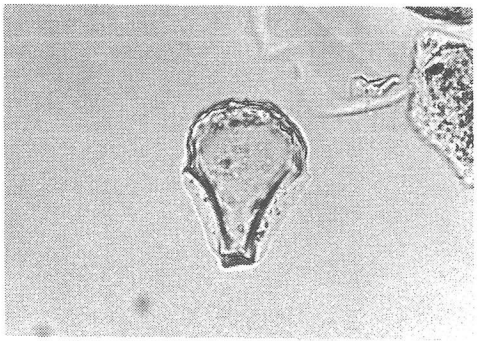
（単位：×100 個／g）

分類群	縄紋時代晩期の溝埋土 A	縄紋時代晩期の溝埋土 B	縄紋晩期遺構 C
イネ	15	21	
ヨシ属	15	7	7
タケ亜科（おもにネザサ節）	192	159	152

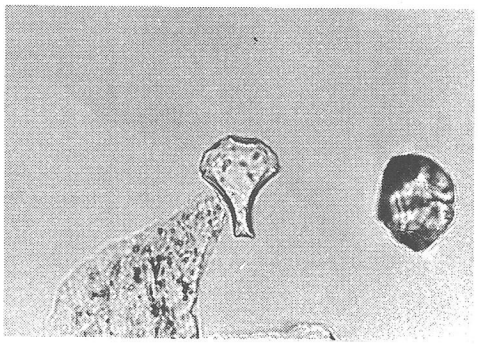
植物珪酸体の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

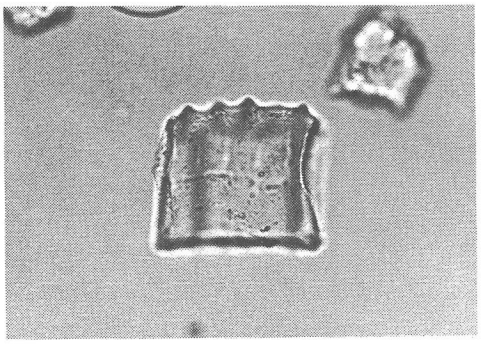
No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	縄紋晩期の溝埋土	B
2	イネ	縄紋晩期の溝埋土	B
3	ネザサ節型	縄紋晩期の溝埋土	B
4	クマザサ属型	縄紋晩期の溝埋土	B
5	クマザサ属型	縄紋晩期の溝埋土	A
6	メダケ節型	縄紋晩期の遺構	C



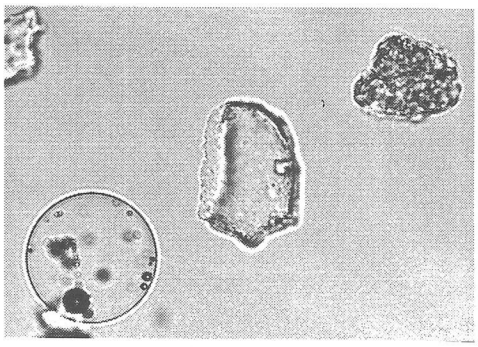
1



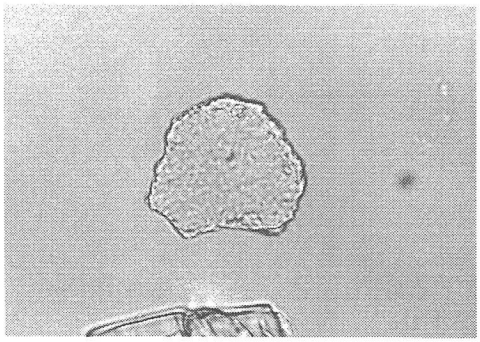
2



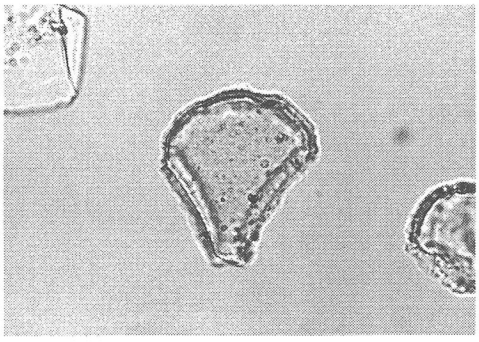
3



4



5



6

0　50　100 μm

Ⅱ　吉野口遺跡出土黒曜石製剥片の産地および管玉の石材について

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

吉野口遺跡炉状遺構１出土の黒曜石製剥片（縄文時代晩期）の原産地および管玉の石材を推定するため、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析を実施した。この分析装置は(1)分析資料の形状を変えることなく非破壊で分析できる。

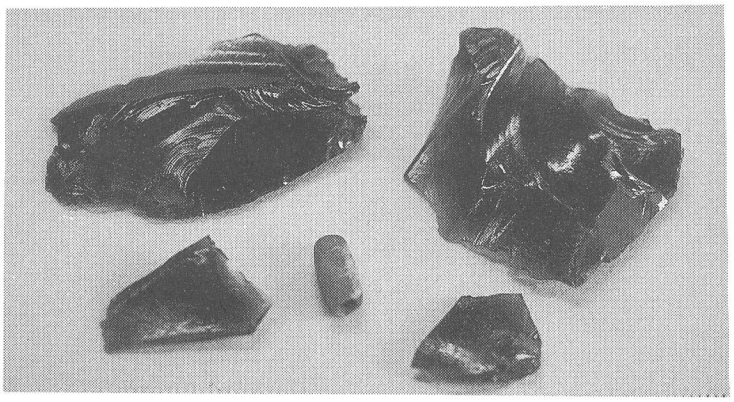
まず、黒曜石産地である島根県隠岐島島後の３ヶ所（久見、津井、加茂）と九州地方の佐賀県腰岳産地の原産地原石と参考資料として、大分県吉松市場遺跡（大分県姫島産）、長野県石神遺跡（和田峠産）の原産地原石について分析を行い、第１・２図K_2O-CaO，$Fe_2O_3-TiO_2$、の各散布図で産地の領域を確定した。そして、この両散布図に表１の吉野口遺跡（３点）、総社市長良山採集石器（１点）をプロットした。第１図K_2O-CaO散布図では、吉野口遺跡出土の黒曜石剥片はどの産地にも入らなかった。ただ、佐賀県腰岳の産地にもっとも近い分布を示した。また、第２図$Fe_2O_3-TiO_2$散布図では、佐賀県腰岳、大分県姫島の原産地領域にプロットした。また、総社市長良山採集の黒曜石は、隠岐の津井原産地領域にほぼプロットした。

以上のように、吉野口遺跡出土の黒曜石製剥片は、現段階で比較できる原産地資料（島根県隠岐島、佐賀県腰岳、大分県姫島、長野県和田峠）で産地推定を試みると、佐賀県腰岳に近い分析結果となった。しかしながら、今回比較した原産地以外にも多数の産地があり、これらの産地も加えて検討する必要がある。

次に、緑色の管玉について、石材の分析を行った。

この結果、表２の分析では、SiO_2が50.76%、Al_2O_3が28.10%、K_2Oが 11.13%と特徴ある結果となった。この分析結果からこの管玉は、ヒスイの特徴であるNa_2Oが含まれておらず、硬度的にも針先で傷が付くなど軟らかいことからヒスイとは考えられない(2)。しかし、それ以外の石材として考えられるものとしては、K_2Oが 11%と多い岩石・鉱物はない。このように、今回の非破壊分析では石材の特定ができなかった。今後の課題である。

註）(1) 分析装置は、セイコー電子工業株式会社卓上蛍光Ｘ線分析計SEA-2010Lを使用した。
　　定量は、ファンダメンタル・パラメーター法（理論計算法）により算出した。
　(2) ヒスイの硬度は５～６である。



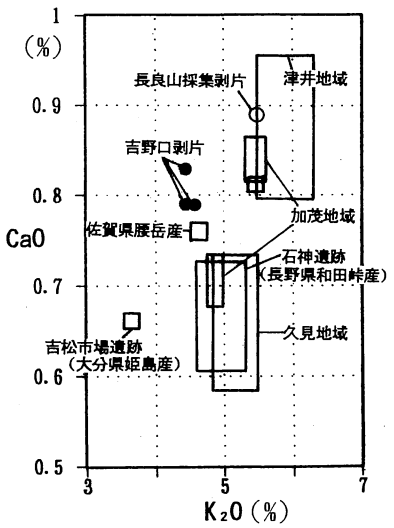
吉野口遺跡出土黒曜石・管玉

表1　吉野口遺跡炉状遺構1出土黒曜石石器の分析値（%）

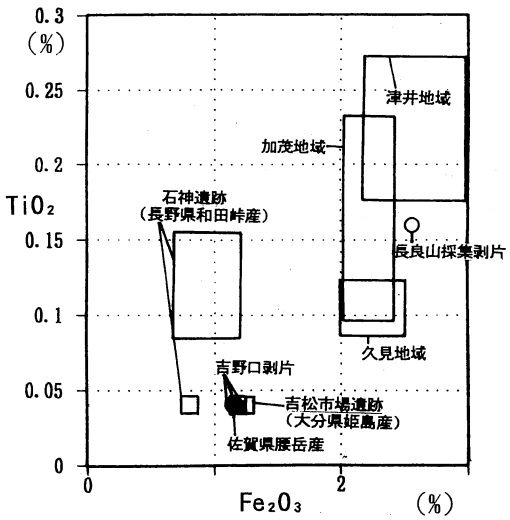
分析試料名	時　期	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MgO	CaO	Na_2O	K_2O
吉野口遺跡1	縄文晩期	75.23	0.03	12.83	1.20	0.98	0.79	4.19	4.57
〃　2	〃	75.75	0.04	12.72	1.19	1.06	0.83	3.80	4.44
〃　3	〃	75.93	0.04	12.68	1.16	1.00	0.79	3.82	4.43
長良山採集	不　明	73.43	0.16	12.81	2.56	0.95	0.89	3.60	5.45

表2　吉野口遺跡炉状遺構1出土管玉の分析値（%）

分析試料名	SiO_2	K_2O	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	CaO	MgO
吉野口遺跡	50.76	11.13	28.10	1.16	1.74	1.80	2.22



第1図　黒曜石原産地原石分布領域と
吉野口遺跡出土黒曜石剥片散布図



第2図　黒曜石原産地原石分布領域と
吉野口遺跡出土黒曜石剥片散布図

Ⅲ　吉野口遺跡（鯉山小）出土の鎌倉時代人骨

岡山理科大学総合情報学部
川　中　　健　二

はじめに

吉野口遺跡は岡山市吉備津に所在し、１９９１年８月から１９９２年１月にかけて岡山市教育委員会によって発掘調査が実施された。発掘調査区内には、道勝寺という寺院が明治時代まで建っていたことが知られている。この寺院は、源平の合戦において木曽義仲との戦闘で敗死した平家方の武将妹尾（瀬尾）太郎兼康の菩提寺であったと伝えられてきたものである。また、調査区の隣接地にその墓と伝承されている宝篋印塔（「妹尾太郎兼康公墓」あるいは「妹尾兼康供養塔」）が現存している。

調査の結果、この遺跡は弥生時代から江戸時代にわたる複合遺跡であることが判明した。それらの遺物・遺構包含層の中の鎌倉時代のものと認定される層から、多くの柱穴とともに、多量のかわらけが破棄された土壙が検出された。このかわらけの下の土壙の底部から人骨が出土した。

人骨の出土状況

出土した人骨は、頭蓋骨とそれに続く脊椎骨の一部だけで構成されており、それ以外の骨はまったく残存していない。頭蓋骨は左を上にし、顔を南に向けて横たえられた状態で出土した。残存している骨の保存状態は比較的良好であるように見え、頭蓋骨を構成している骨の大部分は残存しているようである。しかし、脳頭蓋の骨も顔面頭蓋の骨も多くの部分が破損し、さまざまな大きさの破片になっている。

脳頭蓋の左側、つまり上を向いていた部分では、側頭部が前後約15cm、上下約５cmにわたって破損している。破損部位は、眼窩後上縁から始まる側頭線より下で、頬骨弓上縁の高さの側頭窩から乳様突起基部の頭頂乳突縫合および人字縫合の一部をつなぐ線より上の部分である。つまり前頭骨の側頭部、頭頂骨の側頭線から下の部分、蝶形骨大翼、側頭骨鱗部および後頭骨の一部が破損し、前後に長い大きな穴を見せている。これらの破損した骨は、ほぼ４cm×４cmの大きさの幾つかの破片になって頭蓋腔の中に落ち込んで残存している。

ほぼ元の位置に近いところに留まっている左側の脳頭蓋の骨の中にも、破損や位置のずれが認められる。右眼窩上縁の中央部から左側頭線にいたる前頭骨は元の位置に残存している。しかし、左頭頂骨は、側頭線から上方約３cmの幅で、冠状縫合の位置から約６cm後のところまでが割れ、頭蓋骨の厚さの半分程度の位置まで頭蓋腔の方に向かってずれている。さらにその後方の頭頂骨と後頭骨は、矢状縫合の右約２cmまでと人字縫合の下方約３cmまでの部分が１つの破片となって割れている。この破片は、その前方の３cm×６cmの破片とは、折れ曲がってつながっているが、それより正中よりの頭頂骨からは離れ、約１cmの隙間ができている。

左側頭骨の乳突部を含む部分と、それに続く後頭骨の乳突縁に近い外下方の一部も１個の破片として割れ、頭蓋腔の方に向かって落ち込んでいる。左乳様突起の膨らみの基部から先端にかけての部分は、あたかも剥ぎ落とされたかのように欠損し、この欠損部には海綿質が露出している。

左側の顔面頭蓋でも多くの部分が残存しているが、破損状態は上記の脳頭蓋よりさらに著しい。頬骨の中では、眼窩外側縁を構成する部分は残存しているが、外側面から側頭突起にかけての部分は欠損している。上顎骨では、眼窩下縁を構成している部分と、前面の外側方半分が欠損し、上顎洞の内側壁が見えている。歯槽突起の部分は全長にわたって残存している。しかし、上顎左側の歯は、第１大臼歯と思えるもの１本がほぼ元の位置にあるだけで、他の歯はすべて歯槽からはずれ見えない。歯槽部の保存状態はあまり良くないが、歯槽は閉鎖していなかったと思われ、生前には多くの歯が歯槽に納まっていたと考えられる。

下顎骨の左側は、下顎体の正中から約３cmのところで折れている。下顎体の中で、底部は下顎角の近くまでオトガイから続いているが、下顎体の大部分と下顎枝とは１個の破片になって下顎底から離れ、口蓋の方に落ち込んで、右下顎枝の内側面に接している。下顎左側の歯もすべてが歯槽からはずれ、残存している歯も少ない。下顎左側の歯槽部の歯槽中隔はすべて消失しているので、生前の歯の状態を想定することはできなくなっている。

頭蓋骨の右側、つまり下になっていた部分の破損状態は、左側に比べて一段と激しく、骨はほぼ全面にわたって割れ、原型をほとんど留めていない。骨の破片は、いずれも比較的大きいものではあるが、各々の破片はその一部を互いに重ね合わせながら、平面上に並べられたかのようになっている。土壙の底面の形に沿って、再配置されたのであろう。

前頭骨は、正中線から右４～５cmのところで割れている。正中に近い部分は、前述のように、前頭骨の左側の部分とつながり、ほぼ元の位置に留まっている。しかし、それより外側の割れた部分は、さらにいくつかの大小の破片になっている。これらの破片のうち、もっとも前方の眼窩上縁に近い部分は、頭蓋腔の方に向かって折れ曲がっている。その後方の破片は、頭頂骨の冠状縫合より後約１cmの部分と一緒に１個の破片になって、正中に近い部分から大きく外れ、頭蓋腔内に落ち込んでいる。

上記の破片の後の右頭頂骨はさらに３個の破片に割れている。これらの破片のうち上前方部の破片は比較的小さいもので、他の破片の外側に残されている。これより下の鱗縁に至る部分は三角形になって、その頂点を形成している鱗縁（おそらく乳突角に近い鱗縁後部と思われる）は、正常であれば、それより外側に位置しているはずの側頭骨鱗部の外側に位置するようになっている。つまり、側頭骨鱗部が破片になって、頭頂骨鱗部の内側に潜り込んでいるのである。頭頂骨のもっとも後の部分は、その下に続く後頭骨の後頭鱗の一部と一緒になって大きな１個の破片になり、その左側、つまり上になって埋っていた部分とは接しているが内側に向かって大きく折れ曲がっている。後頭骨の外後頭隆起を含む部分は１個の破片になり、他の破片とは食い違うようになっている。

側頭骨の乳様突起を含む岩様部は、外耳孔および頬骨弓の後部を含む部分とともに１個の破片になっている。この破片に含まれている下顎窩には、下顎骨の右関節突起が関節した状態で納まっている。上記の破片以外の側頭骨、つまり側頭骨鱗部は、その下半が欠損し、残存している上半は、前述のように、頭頂骨鱗縁の下に潜り込むように食い違っている。

右頬骨では、前頭突起はほぼ元の位置に留まっているが、それ以外の外側面と眼窩下縁を形成していた部分は１個の破片になっている。この頬骨の破片は、側頭面を外側に向けるように回転し、さらに内側方向に向かって位置をずらしていて、右上顎骨の骨体に陥入している。

この頬骨の位置のずれのために、右上顎骨の鼻切痕（つまり梨状口の右外側縁）は、鼻骨のほぼ真下の位置にまで曲り、さらに歯槽突起を含む右上顎骨下半部は左上顎骨から外れて、下方に向かって位置

をずらしている。

下顎骨の右側でも、正中から2～3cmのところで、下顎体が割れている。さらに右下顎角を含む部分の骨も割れて、小さい破片になっている。右側の上下の歯も、多くのものが消失し、残存している歯も、元の歯槽に納まっているものはほとんどない。

頭蓋骨の後頭部から、下顎枝に平行して下方に続いている骨は、保存状態が悪く、原形を留めてはいない。しかし、その位置関係から、頸椎と見なしてよい。左右の乳様突起に挟まれるようにして残存しているものからはじめて、椎体と考えられるものが6個認められ、したがって第1～6頸椎が残存しているということができる。どの頸椎においても、棘突起等の突起類はほとんど消失している。

残存している脳頭蓋の骨の表面に、幾つかの傷のような痕が認められる。それらの傷は、外板の表面だけについた浅く細長い溝状のものや、やはり浅いが幅が1cm近くの幅広のものがある。また、外板を貫通しているが、内板は残っているという不規則な形の穴が、正中より左側の前頭骨から頭頂骨にわたって、少なくとも7個認められる。

骨の破損状況と表面の傷についての所見

上述のような出土状況から、本人骨は土壙の底に置かれるより以前に胴部から切り離され、頭蓋骨と頸椎の一部だけが（言い換えれば“首”だけが）、土壙の底に置かれたといってよいだろう。

また、本人骨に見られるさまざまな骨の破損が、土壙の底に置かれるより前に起こっていたことにも疑いはないということができる。例えば、土の中に埋もれている間に加わった土圧といった（自然の）力によって、骨の破損が起こったとは考えることはできないのである。そのような力によると思われる骨の歪みは、厚さが薄い顔面頭蓋の骨の一部には認められるが、脳頭蓋の厚い骨には認められない。脳頭蓋の骨の破片の多くは、歪むことなく、互いに分離している。そして、それぞれの破片の割れ口はかなり明瞭に保存されているのである。“首”が土壙の底に置かれるより前に、かなり激しい打撃が加えられたに違いない。

それらの打撃のうち、正中線より左側で側頭線より上の前頭骨から頭頂骨にかけての部分の外板にさまざまな形の“傷”を残したものは、太刀のような鋭い刃物や、槍のような武器の鋭い尖端によって加えられたものかもしれない。一方、左の側頭部や下顎、および右の頭頂部から下顎にいたるほぼ全面にわたって起こされた骨の破損は、平坦な面をもつ鈍器によって加えられた打撃によるものと思われる。刃物や槍のような武器による打撃は、頭蓋骨の外板に傷を付け、鈍器による打撃は、骨を破損したと推測できるのである。

上記2種類の打撃の中では、頭蓋骨の外板に傷を付けた打撃が先に加えられ、その後で、脳頭蓋から顔面頭蓋のほぼ全面を破損させた打撃が加えられたものと思われる。本頭蓋骨は、大きく破損してはいるが、脳頭蓋から顔面頭蓋にかけての正中線がずれるには至っていない。頭蓋全体が先に破損し、その後で頭蓋冠の外板に傷を付けた打撃が加えられたのであれば、脳頭蓋の正中線と顔面頭蓋の正中線とはずれていただろうと思われるのである。

頭蓋骨の左右のほぼ全面に及んでいる骨の破損は、左右から各々に打撃を加えられた結果かもしれない。あるいは、堅くて扁平な石板のようなものの上に頭蓋骨を横たえ、上方だけから打撃を加えても、本頭蓋に見られるような破損が起こされるのかもしれない。

これらの打撃は、骨の表面に傷をつけ、あるいは骨を破損したのであるが、個々の破片をばらばらに

してしまうというほどまでには強いものではなかった。打撃によって、皮膚などの軟部組織は傷つけられたはずである。しかし、骨の破片の多くが元の位置からずれているとはいえ、大規模な破片の移動は起こっていないし、すべての破片がまとまって出土しているので、この“首”が土壙の底に置かれたときには、すべての骨の破片は軟部組織によって繋ぎ合わされていたはずである。左側の（つまり、上を向いて出土した）側頭部の骨の破片が頭蓋腔の中に落ち込んだのは、軟部組織が腐食して消失した後のことだっただろう。

性と年齢の推定

残存している骨は、著しく破損した頭蓋骨と、保存状態が良くない頸椎だけである。したがって、この人骨の性や死亡時の年齢を推定するための材料は多くない。

性を推定するための材料は、脳頭蓋の骨のうちの残存している部分から受け取ることのできる頑丈さに関する印象や、眉間の隆起や乳様突起、あるいは下顎のオトガイ等の部分の大きさや頑丈さである。これらの部分の形状からは、本人骨が男性のものであると判断することが可能である。

本人骨の死亡時の年齢を推定するための材料は、脳頭蓋の主要な縫合の癒着状態ぐらいしか残されていない。縫合のうち、冠状縫合、矢状縫合および人字縫合の、いわゆる三主要縫合は、頭蓋腔に面した内板側（つまり内頭骨縫合）では、観察できる限り、完全に癒着が完了し、縫合線の痕跡さえほとんど確認することができなくなっている。

また、外板側でも、これら三主要縫合では、癒着がかなりの程度に進んでいる。とくに、冠状縫合では癒着度は高く、非常に単純になった縫合線の痕跡が認められるに過ぎない。矢状縫合でも癒着は進み、縫合の一部では縫合線の痕跡が認められなくなっている。縫合線の痕跡が認められる部分でも、単純化が進んでいる。人字縫合でも、正中に近い部分は癒着が完了し、外側部でも縫合線は痕跡的に残っているに過ぎない。

一方、右側の鱗状縫合では、上述のように、側頭部の骨が破損したときに、頭頂骨鱗縁と側頭骨鱗部とがはずれて動き、両者の内外の位置関係が逆転してる。したがって、この縫合では癒着が始まっていたとしても、あまり進んではいなかったということができる。

頭蓋骨の縫合の癒着の進行状態には個体差が大きいことがよく知られている。したがって、縫合の癒着度にもとづく死亡年齢推定の信頼度はあまり高いものではない。しかし、本人骨の年齢を推定するための材料は縫合の癒着度しかないので、それにもとづいてあえて年齢を推定すると、熟年（４０～５９歳）には達していたと推定してよいだろう。一方、右鱗状縫合の後半の部分は癒着がまだ完了していなかったので、７０ないし８０歳といった高齢にはまだ達していなかったということができるだろう。つまり、本人骨の死亡時年齢は、下限が４０歳ぐらいで、上限が７０歳ぐらいという幅の中にあるだろうと推定してよいと思われる。

おわりに

本人骨は、妹尾（瀬尾）太郎兼康の菩提寺であると伝えられていた道勝寺の寺院跡から出土した。発掘担当者によれば、人骨の上から出土したかわらけ等の遺物の年代も、彼が死亡したと伝えられている年代（後述）と矛盾しないという。本人骨に関する所見の１つのポイントは、それが妹尾太郎兼康の頭蓋であると考えることができるか、あるいはそう考えても矛盾がないかという点にある。

いうまでもなく、余程特殊な個人的特徴が伝承され、それが人骨に確認できるとか、個人を特定することができるような副葬品が出土するといったことがない限り、出土人骨を特定の個人のものと鑑定することは不可能である。そのような特徴や副葬品を伴っていない本人骨を妹尾太郎兼康のものであると、積極的に鑑定することはできないのである。したがって、本人骨について鑑定し得ることは、推定死亡時年齢や出土状況から判断して、兼康のものと考えても矛盾はないといえるか、あるいはそのような想定が不可能であるか、といったことになる。

妹尾太郎兼康については、『平家物語』や『源平盛衰記』といった軍記物で触れられている。それによると、寿永２年（１１８３年）に、木曽義仲軍との戦いで敗れて自害し、嫡子や郎等１人とともに斬首されたと物語られている。しかし、その出自のみならず、出生についても、信頼にたる資料は残されていない。

岡山市妹尾の郷土史家、同前峰雄氏は、兼康の生涯ついて考証されている（註１）。それによると、兼康の生年については、大治元年（１１２６年）説と、保延２年（１１３６年）説の２説があり、いずれとも判断しがたいが、大治元年説をとると述べておられる。つまり、兼康は５７歳または４７歳で討死した可能性があり、同前氏は５７歳討死説をとると述べておられるのである。いずれの出生年説をとるにせよ、その討死時の年齢は、本人骨についての推定死亡時年齢の範囲（つまり４０～７０歳）の中に納まっている。また、『平家物語』の一書には、「兼康はいまは六十にあまりたる者の・・・」という科白が記述されている。この年齢も正確なものとはとうてい考えられないが、上述の推定年齢の幅の中に納まっている。死亡時の推定年齢という点からは、本人骨が兼康のものであるかもしれないと想定しても矛盾はない、あるいはその可能性を否定することができないといってよいだろう。

本人骨が、頭蓋骨とそれにつながる頸椎だけで構成され、それ以外の骨が土壙から検出されていないという状況は、兼康が討死後に斬首されたという『平家物語』等による記述と矛盾はしていない。また、頭蓋骨に加えられた激しい打撃も、もし本人骨が兼康のものであれば、討死に至るまでの彼と木曽義仲との間の確執を考慮に入れれば、充分にあり得ることのように思われる。

これらの点から考えて、本人骨が妹尾太郎兼康のものという想定を、積極的に肯定することはできないものの、その可能性を否定することはできないということができるだろう。

『平家物語』には、兼康ら主従３人の首は、斬首された後、備中国鷺が（の）森にかけられたとあるが、その後の処置については、何も触れられていない。「鷺が森」の所在は不祥であるが、現在の総社市上林、あるいは倉敷市の北部と推測されている。兼康のものと想定しても矛盾のない本人骨だけが、なぜ鷺が森から岡山市吉備津に運ばれたのか。土壙の底に置かれたその“首”の上に、なぜ多量のかわらけが破棄されたのか。これらの問題については、歴史家による考証をまたねばならない。

本人骨の顔面頭蓋は著しく破損し、薄い骨はかなりもろくなっているので、復元は恐らく不可能だと思われる。また、脳頭蓋の骨の保存状態は、顔面頭蓋の骨よりよいが、骨に付着した土を取り除く際に受けた印象から、個々の破片を分離しようと試みると、その際に破損し、復元を困難にする可能性が強いと思われる。

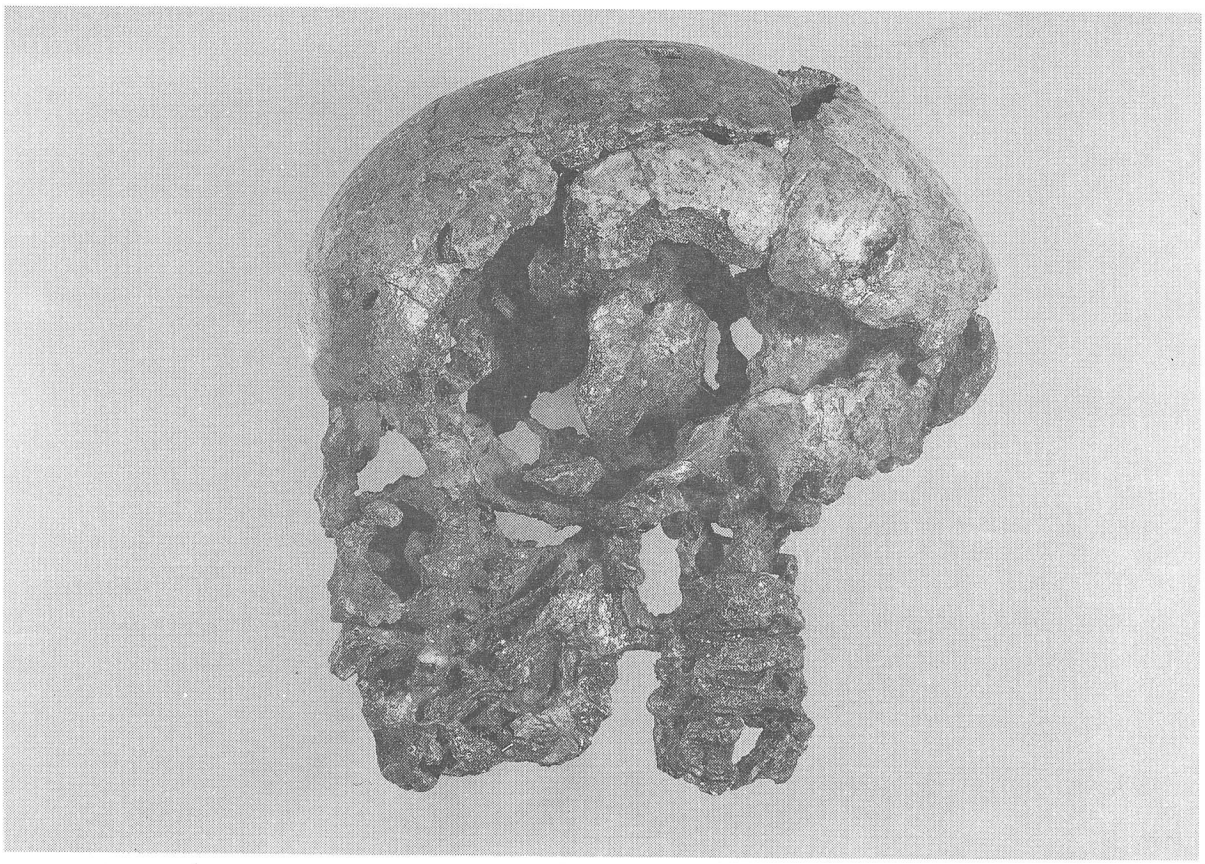
一方、本人骨が、中世における戦闘の敗者に対する処置の結果を留めているのであれば、それを保存することも意義のあることだと思われる。したがって、本人骨は、あえて出土した状態のままに保存することにした。そのため、人類学的な計測もおこなうことができなかったことを付記しておきたい。ま

た、計測はできなかったが、本人骨の頭蓋冠は、著しい長頭型であるという、いかにも中世人らしい特徴を見せていることも付け加えておきたい。

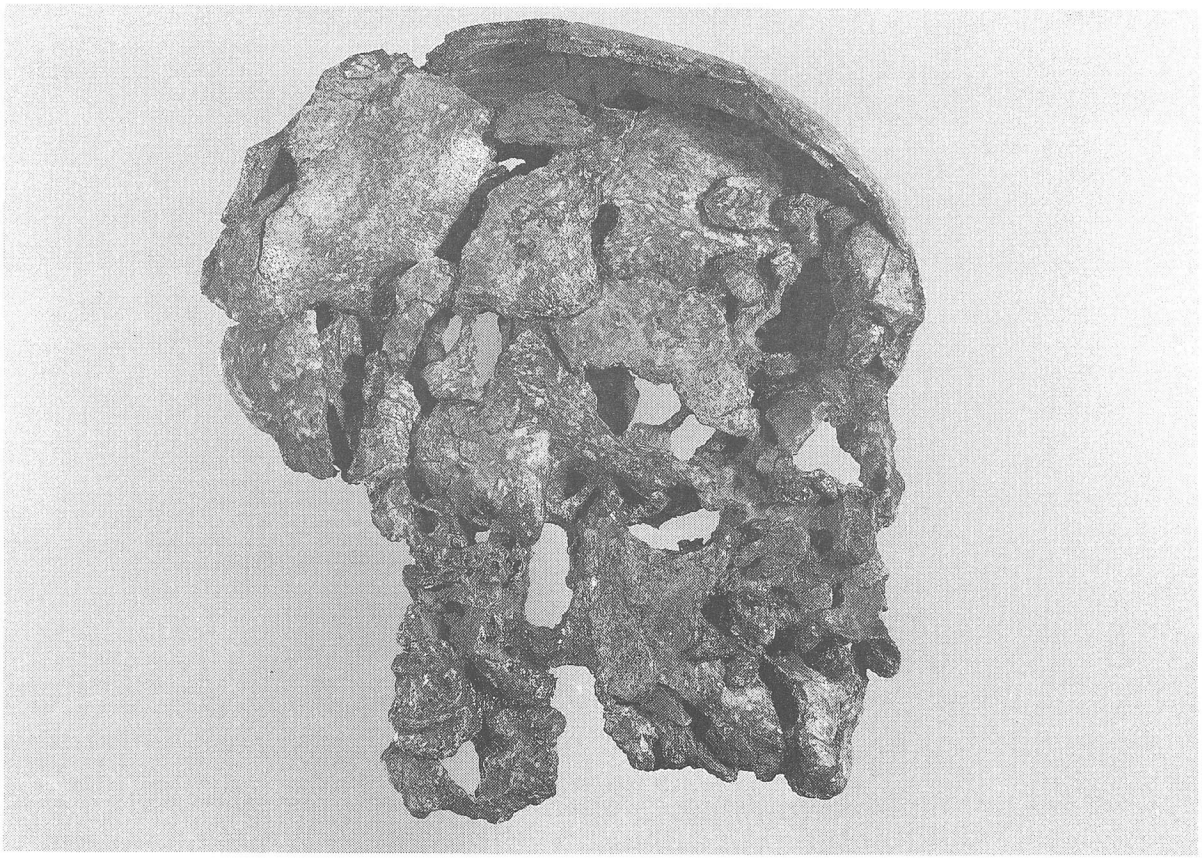
本人骨を調査する機会は、岡山市教育委員会から与えて頂いた。とくに発掘担当者の草原孝典氏からは、調査機会を与えて頂いただけではなく、文献についても御教示を頂いた。記して感謝の意を表わしたい。

（註１）

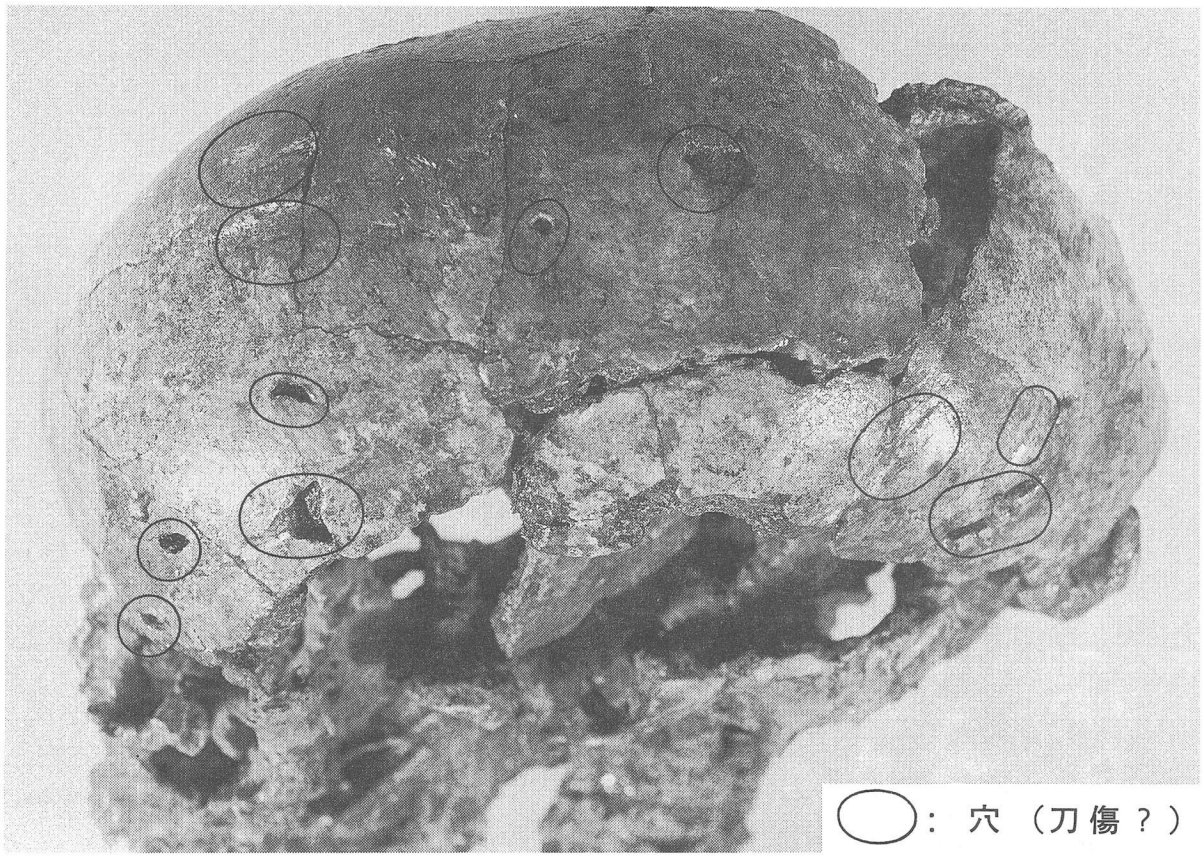
同前　峰雄，１９８７，『悲運の平将「妹尾太郎兼康」評伝 ― 十二カ郷水利の偉功 ― 』，日本文教出版株式会社，岡山.



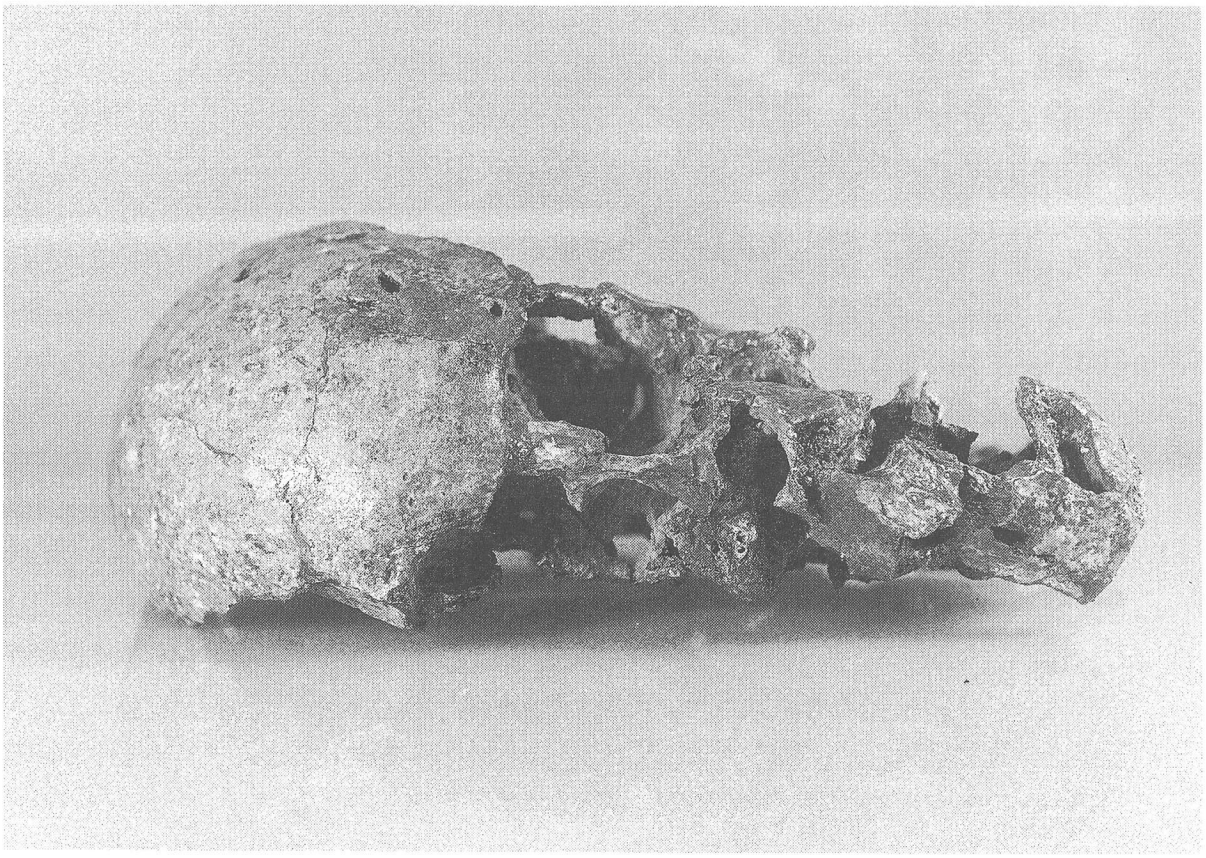
左側面観



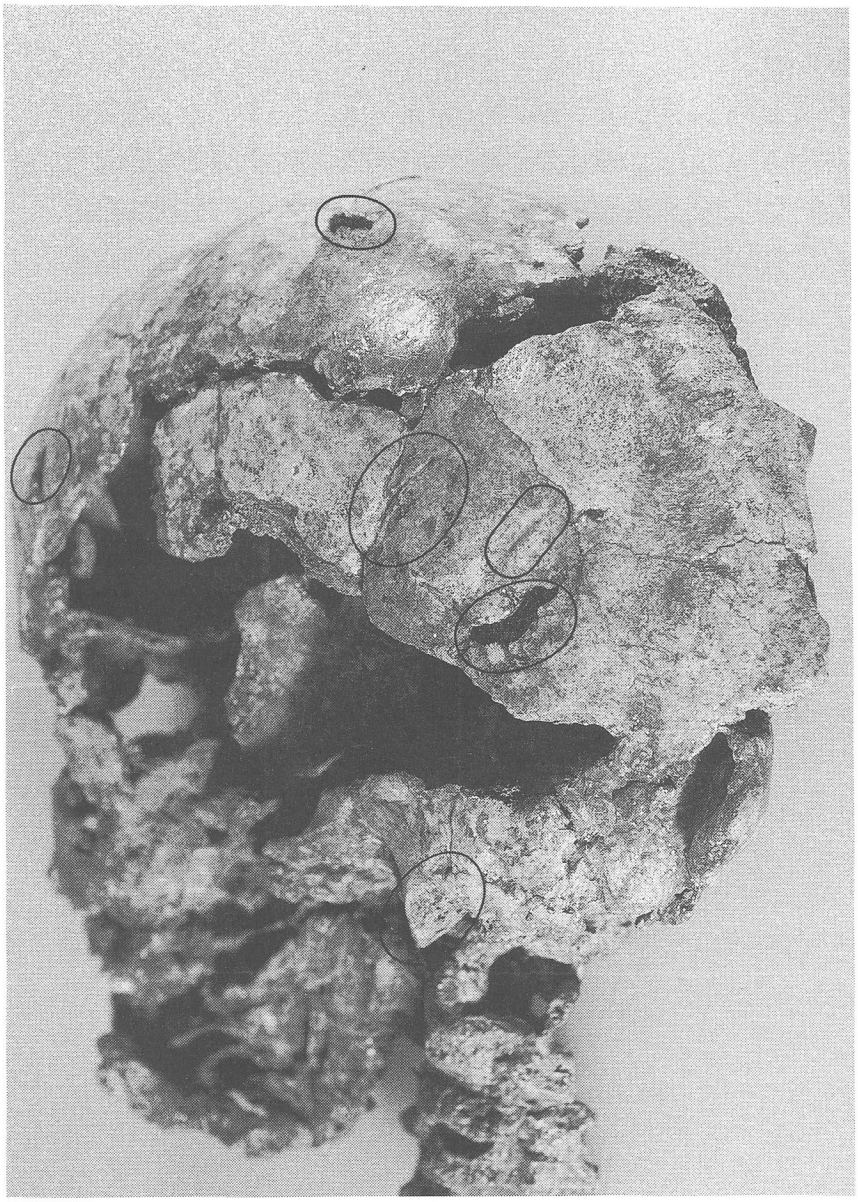
右側面観



頭蓋冠左上面観



前面観



左後面観

Ⅳ　吉野口遺跡出土鉄滓の金属学的調査

大澤　正己

概　要

6世紀後半に比定される土壙出土の鉄滓を調査して次の事が明らかになった。

出土鉄滓は、磁鉄鉱を始発原料とした炉底塊破片で、鉱石製錬滓に分類される。炉底塊の含鉄部から鍛冶原料とする荒鉄（製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物）の小割選別で廃棄された残滓と推定される。

1．いきさつ

吉野口遺跡は、岡山市吉備津に所在する弥生時代から古墳時代、奈良、鎌倉、江戸時代にわたる複合遺跡である。このうち、古墳時代の6世紀後半に属する方形プランのカマド付き竪穴住居7軒と関連をもつ鉄滓廃棄土壙が検出された。この出土鉄滓を通して当時の鉄生産の実態を把握する目的で、鉄滓の調査依頼が岡山市教育委員会よりあった。

2．調査方法

2－1、供試材

Table. 1に示す。当初、5点の鉄滓が提示されたが、いずれも同系であったので2点に絞って供試材とした。

Table. 1　　供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目			
				大きさ（mm）	重量（g）	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	粉末X線回折	化学組成分析
YNS-1	鉄滓	土　壙	6C後半	72×70×45	284	○	○	○	○
YNS-2	〃	〃	〃	88×65×58	388	○	○		○

2－2、調査項目

（1）　肉眼観察

（2）　顕微鏡組織

鉄滓は水道水で充分に洗浄・乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研摩紙の#150, #240, #320, #600, #1,000と順を追って研摩し、最後に被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上

げ、光学顕微鏡観察を行なった。

（3）　ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成の同定を目的としてビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行なった。試験は鏡面研摩した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

（4）　粉末X線回折（X－ray　Diffractometer）

X線回折とは「単結晶または粉末試料にX線を照射すると、それぞれ固有のX線が回折する」現象をいう。X線回折分折法は、この回折角と回折強度から物質を同定する方法である。この分析法の基本は状態分析法であり、物質中の構成元素を求めるものでなく、あくまでも形態とその量を知ることである。試料調整は分析用に粉砕したサンプルを更にメノウ乳鉢で細粒化（325メッシュの篩を通る程度）している。

鉱物組成の同定には、ＡＳＴＭカードと比較する方法がとられる。ＡＳＴＭカードは、ＡＳＴＭ　Ｘ－ray　Powder　Data　File と呼ばれ、ＡＳＴＭ（American　Society　for　Testing　Materials）から発行されている。

（5）　化学組成分析

鉄滓の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total　Fe)，金属鉄（Metallic　Fe)，酸化第１鉄（FeO）：容量法。

炭素（C)，硫黄（S）：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO_2)，酸化アルミニウム（Al_2O_3)，酸化カルシウム（CaO)，酸化マグネシウム（MgO)，酸化カリウム（K_2O)，酸化ナトリウム（Na_2O)，酸化マンガン（MnO)，二酸化チタン（TiO_2)，酸化クロム（Cr_2O_3)，五酸化燐（P_2O_5)，バナジウム（V)，銅（Cu）：ＩＣＰ（Inductively　Coupled　Plasma　Emission　Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

３．調査結果と考察

（1）　ＹＮＳ－１：鉄滓（炉底塊：鉱石製錬滓）

①　肉眼観察：表面は破砕面で一部に旧皮に木炭痕と流動肌を残す。色調は灰白色を呈し、赤銹が局部に認められた。裏面は全面に青灰色粘土に覆われ炉底塊と判る。含鉄部の抽出で破砕された残滓と考えられる。

②　顕微鏡組織：Photo. ①～②に示す。鉱物組成は、淡灰色短柱状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)，白色粒状結晶のヴスタイト（Wüstite：FeO)，基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鉱石製錬滓の晶癖である。また、ファイヤライトの結晶が大きく成長しているのは箱形炉の炉底塊が徐冷された熱履歴を表わす。

③　ビッカース断面硬度：Photo. １の②は白色粒状結晶の硬度測定の圧痕、③は淡灰色短柱状結晶の圧痕である。硬度値は、前者で438Hv，後者が598Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は450～500Hvであり[2]、白色粒状結晶は僅かに下限値を割るが、ヴスタイト，ファイヤライトの文献硬度値は600～700Ｈｖ[3] で淡灰色短柱状結晶はファイヤライトにそれぞれ同定される。

④　粉末X線回析：Fig. １に示す。検出鉱物相はヴスタイト（Wüstite：FeO）54.3%，ファイヤ

ライト（Fayalite：$Fe_2SiO_4 = 2FeO \cdot SiO_2$）45.7%であった。

⑤　化学組成分析：Table. 2に示す。炉底塊なので鉄分が多く、ガラス質成分は少ない。すなわち、全鉄分（Total　Fe）は製錬滓としては高めの51.55%あり、このうち、金属鉄（Metallic Fe）は0.30%，酸化第1鉄（FeO）が大部分で57.42%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）は9.46%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）は29.95%で、このなかに鉄と滓の分離を促進する塩基性成分（CaO＋MgO）を3.3%を含む。

砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）が0.2%，バナジウム（V）0.01%と低値で製鉄原料は磁鉄鉱が想定される。また、酸化マンガン（MnO）の0.20%の少量も砂鉄系を否定する値であった。なお、他の随伴微量元素も特異な点はなく、有害元素の硫黄（S）0.02%，五酸化燐（P_2O_5）0.27%なども問題はなく、銅（Cu）の0.003%も高いものではなかった。鉱石製錬滓に分類される。

（2）　YNS－2：鉄滓（炉底塊：鉱石製錬滓）

①　肉眼観察：前述したYNS－1鉄滓と同系であって、該品も破砕された炉底塊であり、全面に灰色粘土が覆う。表面に木炭痕と鉄銹が認められた。

②　顕微鏡組織：Photo. 1の④～⑧に示す。鉱物組成は、ファイヤライトとヴスタイト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成されて、前述鉄滓のYNS－1に準じた組織であった。鉱石製錬滓である。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 1の⑦に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕、⑧は淡灰色盤状結晶の圧痕を示す。硬度値は、前者が438Hv，後者で593Hvであった。両者はヴスタイトとファイヤライトと同定される。

④　化学組成分析：Table. 2に示す。前述鉄滓のYNS－1に近似する。全鉄分（Total　Fe）は47.14%，ガラス質成分35.08%に対して、塩基性成分（CaO＋MgO）3.92%，二酸化チタン（TiO_2）0.22%，バナジウム（V）0.01%，酸化マンガン（MnO）0.25%などであった。鉱石製錬滓に分類される。

4．まとめ

吉野口遺跡の6世紀後半に推定される土壙出土の2点の鉄滓は、鉱物組成がファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）とヴスタイト（Wüstite：FeO）の主要鉱物相で構成され、化学組成は二酸化チタン（TiO_2）0.20%台，バナジウム（V）0.01%など低値の特徴をもち鉱石製錬滓に分類された。この2点の鉄滓は、箱形製鉄炉の炉底塊であって、これから鍛冶原料となる荒鉄を小割選別した残滓に想定できる。周辺に製鉄炉と鍛冶工房が存在した可能性が窺われた。

西祖山方前遺跡は、7世紀頃に属する磁鉄鉱を始発原料とした製鉄遺跡であったが、吉野口遺跡は、これを遡る製鉄操業を傍証する出土鉄滓の発見となった。また、岡山市内の沖積平野に位置する藤原光町3丁目所在の原尾島遺跡においても5世紀から7世紀のいずれかに比定される製鉄関連遺物（磁鉄鉱，製鉄炉壁，製錬滓）の出土があって[5]、岡山市内域においても、古墳時代の製鉄はほぼ実証されるであろう。

注

① 鎌田　仁『最近の鉄鋼状態分析』アグネ社　1979

② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』 1968

硬度測定対象物		硬度実測値	文献硬度値※1
Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）	※2	560,588	600～700 Hv
磁　鉄　鉱	※2	513,506	530～600 Hv
マルテンサイト	※2	641	633～653 Hv
Wiistite（FeO）	※3	481,471	450～500 Hv
Magnetite（Fe_3O_4）	※4	616,623	500～600 Hv
白　鋳　鉄	※5	563,506	458～613 Hv
亜共析鋼（C：0.4%）	※6	175	160～213 Hv

※1　日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968他

※2　滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物　7C末～8C初

※3　兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶　4C後半

※4　新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製錬　Ulvösplnel　平安時代

※5　大阪府東大阪市西之辻16次調査出土鋳造鉄斧　古墳時代前期

※6　埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄鏃　5C中頃

③ 前掲書②

④ 大澤正己「西祖山方前遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」
『西祖山方前遺跡，西祖橋本（御休幼稚園）遺跡』岡山市教育委員会　1994

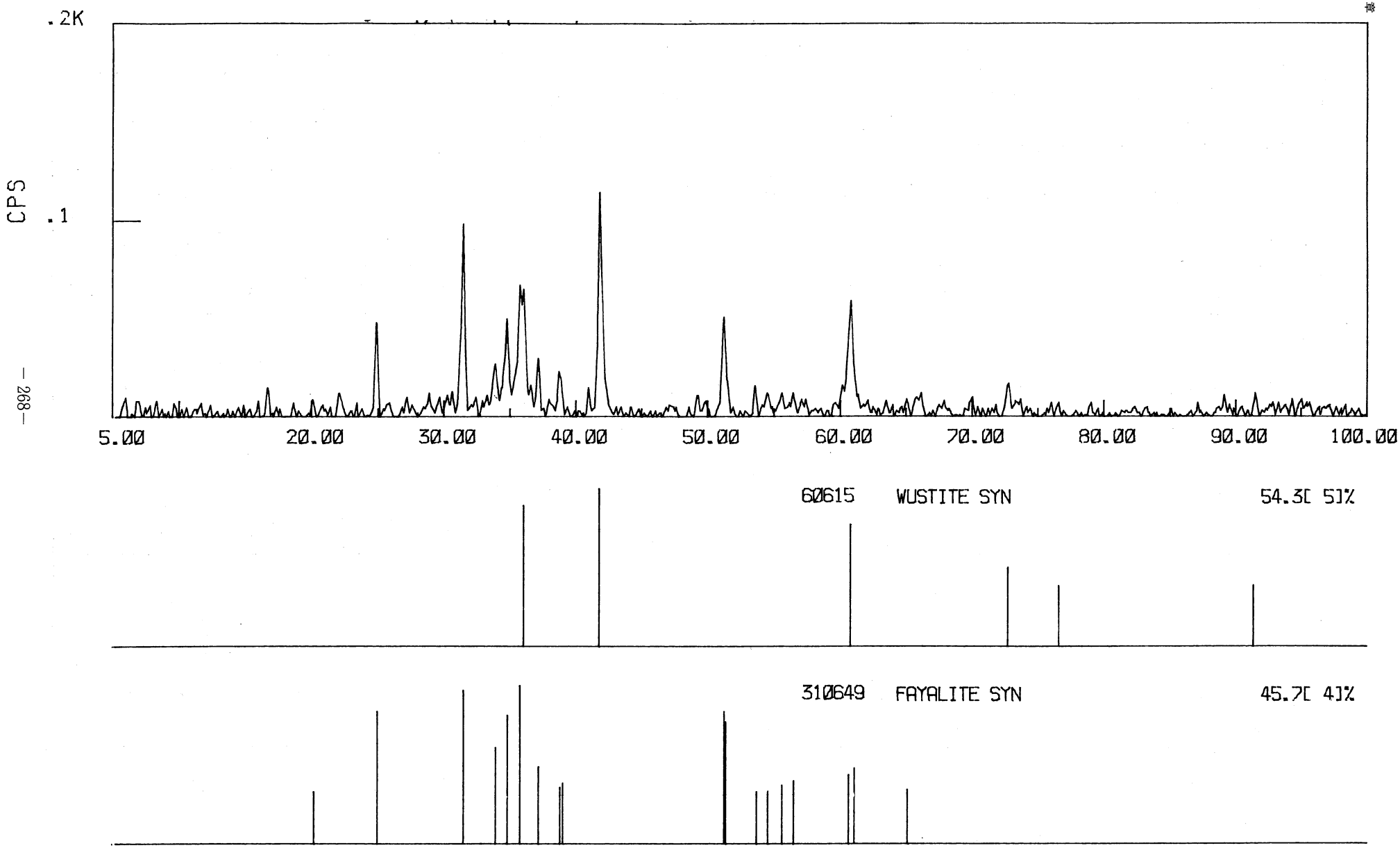
⑤ 岡山県古代吉備文化財センター島崎東氏調査遺跡，平成8年4月1日～8月31日調査。
筆者は平成8年7月16日現地へ赴き、出土遺物を実見させて頂いた。

Table－2　鉄滓と鉱石の化学組成

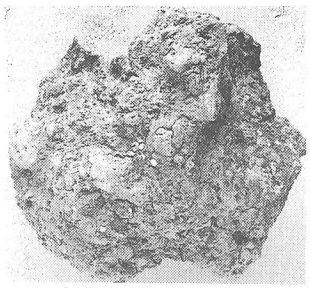
試料番号	遺跡名	出土位置	種　別	推定年代	全鉄分 Total Fe	金属鉄 Metallic Fe	酸化第1鉄 FeO	酸化第2鉄 Fe_2O_3	二酸化珪素 SiO_2 ※	酸化アルミニウム Al_2O_3 ※	酸化カルシウム CaO ※	酸化マグネシウム MgO ※	酸化カリウム K_2O ※	酸化ナトリウム Na_2O ※	酸化マンガン MnO	二酸化チタン TiO_2	酸化クロム Cr_2O_3	硫黄 S	五酸化燐 P_2O_5	炭素 C	バナジウム V	銅 Cu	造滓成分 Σ※	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe	
YNS－1	吉野口	土　　壙	鉱石製錬滓	6世紀後半	51.55	0.30	57.42	9.46	20.35	4.72	2.44	0.86	1.14	0.44	0.20	0.20	0.01	0.02	0.27	0.03	0.01	0.003	29.95	0.581	0.004	
2	〃	〃	〃	〃	47.14	0.14	51.00	10.52	24.12	5.22	2.84	1.08	1.18	0.64	0.25	0.22	0.01	0.01	0.54	0.05	0.01	0.008	35.08	0.744	0.005	
YKY－1	西祖山方前	I区方形土壙埋土	鉱石製錬滓（ガラス質錬滓）	7世紀頃	12.72	－	5.89	11.64	63.0	10.68	2.85	2.30	0.10	0.06	0.14	0.92	0.02	0.006	0.362	0.05	0.012	0.009	78.99	6.210	0.072	
2	〃	〃	〃	〃	12.97	－	9.48	8.01	61.9	10.10	3.03	3.42	0.12	0.04	0.14	0.81	0.01	0.006	0.394	0.08	0.011	0.008	78.61	6.061	0.063	
3	〃	〃	鉱石製錬滓	〃	31.5	－	38.4	2.39	37.7	5.50	4.33	6.91	1.14	0.45	0.25	0.39	0.02	0.028	0.349	0.04	0.007	0.011	56.03	1.779	0.012	
4	〃	〃	〃	〃	34.2	－	19.62	27.09	32.8	4.72	3.20	7.57	0.24	0.07	0.19	0.34	0.02	0.013	0.545	0.60	0.007	0.025	48.60	1.421	0.010	
5	〃	〃	磁鉄鉱石	〃	56.6	－	21.27	57.3	11.08	0.27	2.29	4.68	Nil	Nil	0.12	0.06	0.01	0.009	0.015	0.03	0.002	0.005	18.32	0.324	0.001	
ASM－1	大森（足守中）	水田耕土（包含層）	砂鉄製錬滓	14世紀頃	31.7	－	37.1	4.11	12.50	3.28	4.30	1.01	1.05	0.26	1.60	32.6	0.04	0.022	0.153	0.05	0.35	0.006	22.40	0.707	1.028	※
2	〃	〃	〃	〃	27.74	－	34.0	1.88	19.92	5.00	4.05	1.19	0.87	0.36	1.31	28.68	0.05	0.023	0.325	0.04	0.37	0.006	31.39	1.132	1.034	
3	〃	〃	〃	〃	29.20	－	34.2	3.74	18.20	4.41	3.80	1.19	0.67	0.23	1.37	29.51	0.05	0.018	0.258	0.04	0.37	0.003	28.50	0.976	1.011	
4	〃	〃	〃	〃	25.31	－	29.00	3.96	19.68	4.99	5.42	1.40	1.54	0.48	1.65	29.87	0.04	0.027	0.203	0.04	0.38	0.004	33.51	1.324	1.180	
5	〃	〃	（ガラス質錬滓）	〃	12.93	－	9.92	7.46	55.5	13.41	3.02	1.27	0.24	0.14	0.31	6.11	0.01	0.008	0.189	0.07	0.095	0.004	73.58	5.691	0.473	

※ ASM＝大森（足守中学校）は，岡山市大井360番地に所在する遺跡。
賀夜郡大井郷の想定地。岡山市教育委員会が1990年7月から9月にかけて発掘調査を実施した遺跡で，鉄滓や炉壁が多数出土した。
西祖山方前遺跡資料と一緒に分析を依頼したものである。
岡山市域内における砂鉄製錬滓の資料として掲載していただいた。（岡山市教育委員会）

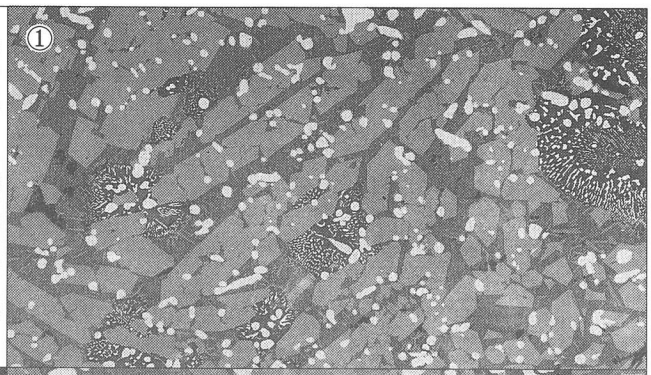
Fig 1　鉄滓（YNS－1）の粉末X線回折プロフィル

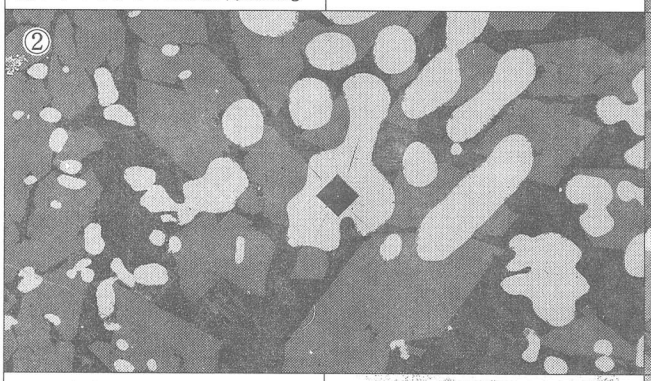


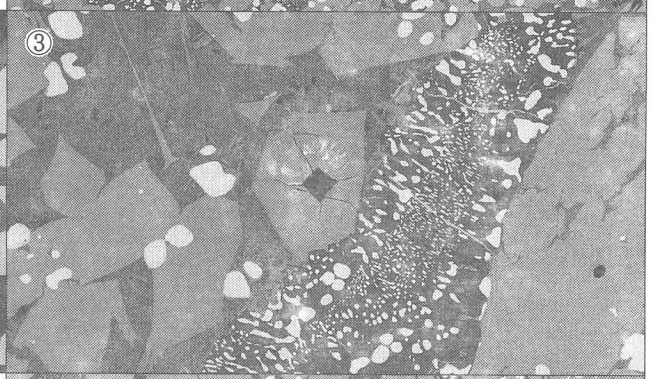
(1)　YSN－1
土壙出土
鉱石製錬滓
①×100
ファイヤライト＋ヴスタイト
② ③×200 硬度圧痕
② ヴスタイト:438Hv荷重100 g
③ファイヤライト:598Hv荷重200 g



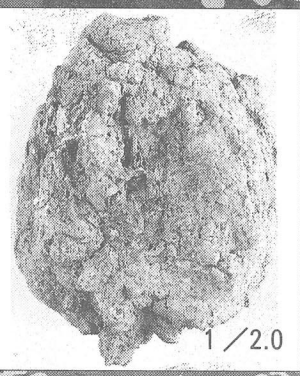
外観写真 1／2.0



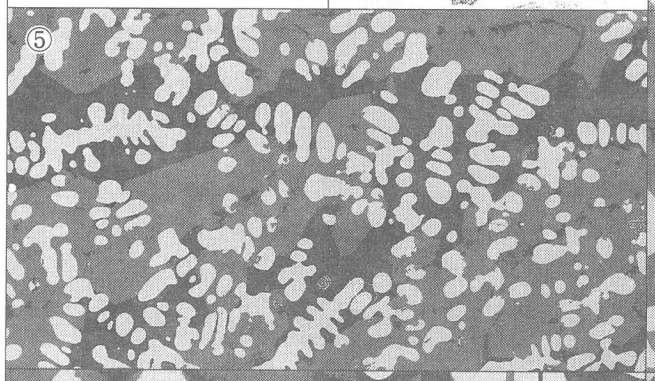


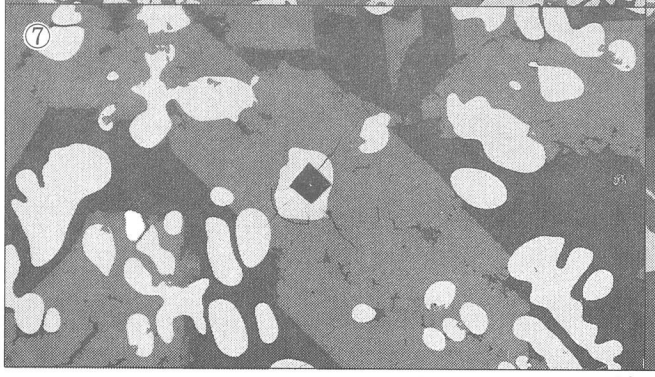


(1)　YSN－2
土壙出土
鉱石製錬滓
①②×100, ③×400
⑦ ⑧×200 硬度圧痕
⑦ ヴスタイト:438Hv荷重200 g
⑧ファイヤライト:593Hv荷重200 g



1／2.0





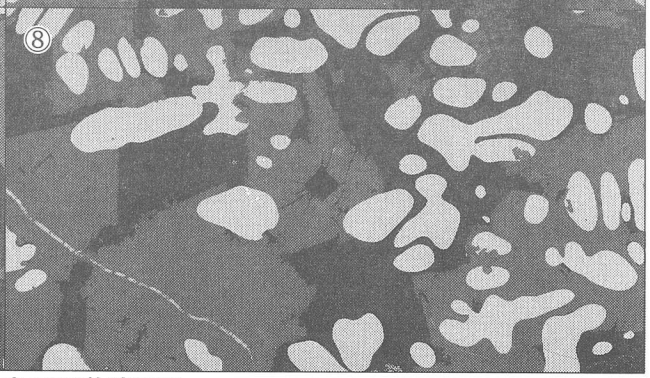


Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織

V　岡山市吉野口遺跡出土の動物遺体

早稲田大学　　金　子　浩　昌

本遺跡からは弥生期以降近世に至る時期の動物遺骸が検出され、時代を異にしてみられた貝類、魚類、獣類の在り方を知る貴重な資料となった。特に弥生期の獣骨にはウマの遺骸が住居跡床面上から検出され、この時期のウマの飼育を確証した。これについては今後の調査によってさらに検証していきたい点である。今回の調査に当たって種々ご教示いただいた岡山市教育委員会文化課の草原孝典氏並びに河田健司氏に御礼申し上げたい。

1．弥生期

住居址－１３出土の脊椎動物

軟骨魚綱　Class　Chondrichthyes

エイ目　Order　Rajiformes

科属不明　Fam. et　gen. indet.

尾棘片１、棘の中間部の小片、幅3.3㎜

（ガーゼ検出）

尾棘先端部片１、現長8.6㎜の破片であるが鋭い先端部と逆刺を残す。

硬骨魚綱　Class　Osteichthyes

イワシ類　Clupeidae　gen. et　sp. indet.

（ガーゼ検出）

尾椎３、椎体長1.3、1.6、1.6㎜

ギギ類　Bagridae　gen. et　sp. indet.

左側胸鰭棘片１、基部幅4.0㎜

ウナギ　Anguilla　japonica

尾椎骨３、椎体長2.4 、3.0、3.1㎜

（ガーゼ検出）

尾椎骨３、椎体長2.0、2.0、2.5

鋤骨１、先端幅1.8。左側主上顎骨１、全長11.6。左側主上顎骨片１

スズキ　Lateolabrax　japonicus

右側歯骨片１、近心部に近い部分を残す破片。歯骨高3.5㎜

尾椎骨１、椎体長2.4

クロダイ　Acanthopagrus　schlegeli

臀鰭棘先端破片１

タイ類　Sparidae　gen. et　sp. indet.

尾椎骨１、椎体長3.5㎜

鳥綱　Class　Aves

カモ類　Anatidae gen. et sp. indet.

左側烏口骨片１、

哺乳綱　Class　Mammalia

モグラ　Mogera　wogura

上腕骨近位骨端、尺骨左側１

ネズミ類　Muridae　gen. et　sp. indet.

胸椎、腰椎、尾椎骨各１、右側下顎切歯片１、脛骨遠位骨端片１、距骨右側１

（ガーゼ検出）

右側上顎切歯１

イノシシ　Sus　scrofa

下顎犬歯右側先端小片１。

ウマ　Equus　caballus

左側距骨、踵骨、中心足根骨、第１＋２足根骨、第三足根骨、第四足根骨、第三中足骨、第四中足骨。

これらの骨は同一個体のもので一括して出土した。

距骨：おおよその形を残すが、左側にある距骨滑車の近位面が発掘時に削られ、元の形が失われている。距骨滑車の前面には金属器で叩いたような傷が幾個所にもみられ、切り込みは１mmから２mm位に達する。これらの傷は踵骨と関節している面にはみられないので、踵骨とつながっている状態のときに付けられた傷であったことがわかる。

踵骨：踵骨隆起部から骨体にかけての部分が斜めに削られ、発掘時の新しい損傷である。踵骨骨体外側面には横方向に付く傷が密接してつくが、それにはネズミ類のかじり痕と思われる傷の他にやや深く切り込んだ傷も見られる。

中心足根骨：完存する。現状では他の足根骨と関節したままの状態で取り上げられている。

第１＋２足根骨：完存する。第３足根骨に関節したままの状態で出土している。

第３足根骨：内側の一部を僅かに欠損するが、発掘時の破損である。中心足根骨に密接し、関節したままの状態である。

第４足根骨：遊離しているが完存している。おそらく出土時は関節した状態であったのであろう。

第三、四中足骨：第三中足根骨は骨体中央やや遠位寄りの位置で折れるが、折れ口は新しい。折れた付近の骨表面の損傷は折れた際とその後の破損である。更に遠位骨端の関節部が損傷する。この損傷には新しい損傷面もみられるが、古い損傷と思われる部分もあり、その部分には古い色調が残る。破損部にはすでに切痕などの痕跡をとどめることはないが、その部分に何らかの加工があったのではないかと思われる。

第三中足骨、近位骨端幅：48.0、全長（推定）：264.0mm

第三中足骨の大きさから推定されるこのウマは日本の在来馬のうち中小形に属する御崎馬に一致する。この大きさは筆者が本州において調査する機会のあった近世までの遺跡から出土したウマの遺骸の大きさと一致する。

第四中足骨はかなり破損しながらも近位部から骨体の部分が第三中足骨に関節した状態で出土してい

る。損傷は新しい。

イノシシ　Sus　scrofa

右側下顎骨

下顎枝部分を大きく欠損する他に骨体部の破損はほとんどない良好な標本である。歯牙は切歯及び犬歯と前臼歯P_1，P_2が脱落する。これらの歯が別に採取されていないので、さらに早くに抜け落ちたものと思われる。

顎骨近心部の歯槽縁部に多少ネズミ類のかじりによる損傷がみられる。

骨体部は亀裂が入りながらも分離するまでには至っていない。特別の損傷は見られない。

下顎枝部分は上述のように破損しその大部分を失うが、折れ口には円弧状のものの一部が見られ、下顎骨枝部に開けられた穿孔の一部が残されているのであろう。このことから穿孔をもつ下顎骨が何らかの理由でその部分を破損し、この場所に置かれたものと思われる。

歯はP_3以降を残し、M_3は完全に萌出し、咬耗は末端にも及ぶが、M_3の咬耗はエナメル質の表面に平担面をつくる階段である。

古　代

奈良時代後半溝（Ｐ２７０）

ニホンジカ　Cervus　nippon

左側大腿骨遠位骨端

骨端部分のを残す破片である。関節の滑車部は残されるが、外側顆が割れて失われている。この破損について特別の人為的な加工痕をみることはできない。

遠位骨端に近い位置の後面に細かい切痕がみられる。金属器によって切りつけられた傷である。おそらく解体痕なのであろう。

遠位骨端幅50.0㎜前後の大腿骨と思われる。

ウシ　Bos　taurus

左側第三臼歯M_3

後端の咬頭を破損する他はほぼ完存する。７才前後の個体の臼歯であろう。

歯冠長38.4㎜、歯冠幅16.0㎜

中　世

中世の動物遺体はいくつかのPitから出土しているが、特に注目されるのは多くの鱗とそれに混じって魚骨の出土していることで、こうした時期の魚骨資料を得たのは今回がはじめてではないかと思われる。またアカニシの検出もこれまで出土例はあったもののまとまった出土は筆者ははじめてみる経験であった。

Ｐ３０７

貝　類

アカニシ　Rapana　venosa

破損標本も含めて１１点が検出されている。殻軸と体層を残す標本には、完存する状態で出土している標本が１点ある。ただしこの標本にも亀裂が入り、破損直前の状態である。他の殻も体層部あるいは

軸頂部を欠損することが多い。殻高を計測もしくは推計した結果は次の通りである。
90.0前後、90.0、90.0、112.0、112.0㎜
　他に殻軸のみ残す標本２点、殻軸がほぼ中央で折れている標本１、臍口部をのみを残す標本３点がある。
Ｐ５８
　ここからは多数の鱗が採集されていて、それに混じって魚骨がみられた。魚骨は少数の顎骨、椎骨と多数の鰭その他の棘状のものの破片であった。主要な遺骸は次の通りである。
　硬骨魚綱　Class　Osteichthyes
　イワシ類　Clupeidae　gen. et　sp. indet.
　腹椎骨１：椎体長2.8㎜、尾椎体長１：椎体長2.4㎜
　ボラ　Mugil　cephalus
　尾椎骨１。椎体長4.4mm。同じくらいの大きさの尾椎骨片が別にある。小さな個体のものである。
　マアジ　Trachurus　japonicus
　尾椎骨１。椎体長3.6mm
　スズキ　Lateolabrax　japonicus
　椎骨の検出のみであるが、大きさによって幾つかの個体のあったことがわかる。椎体長計測値。
　腹椎骨：2.0 、2.1 、2.3㎜。腹椎体のごく前方位にある椎骨で横突起がほとんどみられない。　尾椎骨：2.0 、2.3 、2.5 、3.4 、3.6㎜。このなかには上記の腹椎と同一の個体のあったことが推定される。
　腹椎骨：3.6 、3.9㎜、尾椎骨：5.2 、5.4㎜。本遺跡での中形から大形の個体である。
４乃至５個体の骨格はあったのであろう。
　マダイ　Pagras　major
　左側前上顎骨片１、左側歯骨片１、左側歯骨片１（焼けていて灰白色を呈している）。
これらの顎骨から外れたと思われる小さな歯がある。これらの顎骨は骨体の長さが２０㎜位である。
　椎体：腹椎骨片１、椎体長６㎜前後、尾椎骨２（椎体長６㎜、８㎜）。
　これらの遺骸の個体関係については、骨が断片的でもあり比較するには支障があるが、いずれの標本も体長２０㎝位あるいはそれ未満の大きさの個体である。
　多数出土している鱗の多くはタイのものであり、それらもこの程度の大きさの個体の鱗である。
上記の標本から推定される個体数は、およそ３乃至４個体が考えられよう。
　臀鰭血管間棘片：１
両生綱　Class　Amphibia
　カエル類　Anura　fam. indet.
　腰椎１。小さな個体である。
　本Ｐitから採取されたという動物遺体は魚骨その他水棲動物を主としてごくわずかな量であったが、当時の漁獲の状況、資源の様相を知る貴重な資料である。この検出については別の項で述べられていると思うが、筆者の調査できたのは実は遺構内に残されていたもののごく一部であるようである。それは資料として採取したのが、土器などに付着していたものからの検出であって、サンプルとして採取された土壌からのものではないからである。

近　世

溝－14下層

ヒト　Homo　sapiens

右側上腕骨

近、遠位骨端を欠く。骨の破損は古く、骨の劣化後に破損したものと思われる。丈夫な骨体を有し、男性、熟年の遺骸であろう。

ウマ　Equus　caballus

右側中手骨

近位骨端から骨体の半ば以上を残す標本であるが、標本の全体に劣化がみられ、骨表面の損傷は特にひどい。遠位部の破損は新しいものかも知れない。

近位骨端幅34.5㎜

溝－１４

貝　類

アカニシ　Rapana　venosa

殻軸の基部に近い部分の破片が４片ある。同じ個体の破片もあるかも知れないが確認できない。この部分は殻も厚いので保存される率も高かったのであろう。

魚　類

タイ類　Sparidae　sp.

犬歯状に尖る歯１点。おそらくマダイ　Pagras majorの歯ではないかと思われる。歯のみからの種同定は困難であるが、近世に入ってもっとも珍重されているのはマダイであるからである。

哺乳類

ウシ　Bos　taurus

左側大腿骨骨体部

標本の保存はあまり良好とはいえず、大きく二つに割れ、別々に採集されていた。骨表面もかなり荒れた状態である。二つの骨片は接合したが、近、遠位に両端は破損し、他に接合できる骨片はない。このことからこの骨の原位置をこの場所に考定することは直ちにはできないかも知れない。

骨体最少径 32.8㎜

この他にウシもしくはウマのものと思われる肋骨片、椎骨棘突起片、椎体片がある。

結　語

弥生期貝塚出土の魚骨

この時期の貝層内にあった魚骨は多いものではなく、かなり細かい分析を試みたがわずかな資料が得られているのみである。これは必ずしもこの時期の貝塚動物遺骸の特徴というわけではなく、筆者が別の機会にみた足守川加茂遺跡で検出された貝塚では魚骨の出土も多く、近い位置にある縄文後期の貝塚で知られる内容と基本では違いの少ない様相をみたのである。

イワシ類としたのは尾椎骨で椎体長1.5㎜内外の微小なものである。この種の骨はこの地域の貝塚で筆者のみた範囲では知られていない。ただこれには水洗の際のメッシュの大きさにもよる。今回の貝層土壌の水洗がかなり細かい布で濾し採ったことからこのような微小骨が採取されたと思われる。種類は

コノシロあるいはサッパ（ママカリ）ではないかと思われる。

ウナギの遺骸があるが、本種はこれまでの矢部貝塚、足守川遺跡では検出されていない。今後ウナギがこの地域に遺跡でどのように検出されていくか、湾内の環境を考える上でも興味ある問題である。かって児島湾にウナギの多産したことはよく知られるが、考古学的な資料からこの実態をみたいものと思っている。

弥生期住居跡内出土の獣骨

ウマとイノシシが出土している。ウマは弥生期に属する標本として注目されよう。しかも通常このような場合しばしば単独に骨格を出土するが、今回は足根骨から中足骨に至るひとつながりの骨格として出土し、出土状況にも意義のあることが判明したのである。このような出土例はおそらく今回がはじめてのことであろう。イノシシは弥生期においてかなり多く出土する獣である。今回は一点のみであったが、比較的保存の良好な下顎骨を得た。大きく成長した個体のもので、下顎枝に穿孔された痕跡をみせていた。

奈良時代後半期の溝内にあった獣骨

ここからはシカの大腿骨片とウシの歯があった。

中　世

貝類、魚類、獣類といろいろな動物遺体があった。

Ｐ－２３６：あまり大きくないタイ類の尾部棒状骨の破片と木炭塊がある。

Ｐ－３０７：鹹水産の巻貝であるアカニシが一括して出土した。これだけまとまった出土ははじめてであろう。また比較的大形の殻が集められていた。アカニシは中近世の遺跡ではよくみかける貝である。巻貝のなかでは海岸の砂浜で普通に採れ、生で食べた方がおいしい。殻が出てくるところをみるとその可能性もあろう。

他に二枚貝類の断片と魚骨に不明標本１があった。

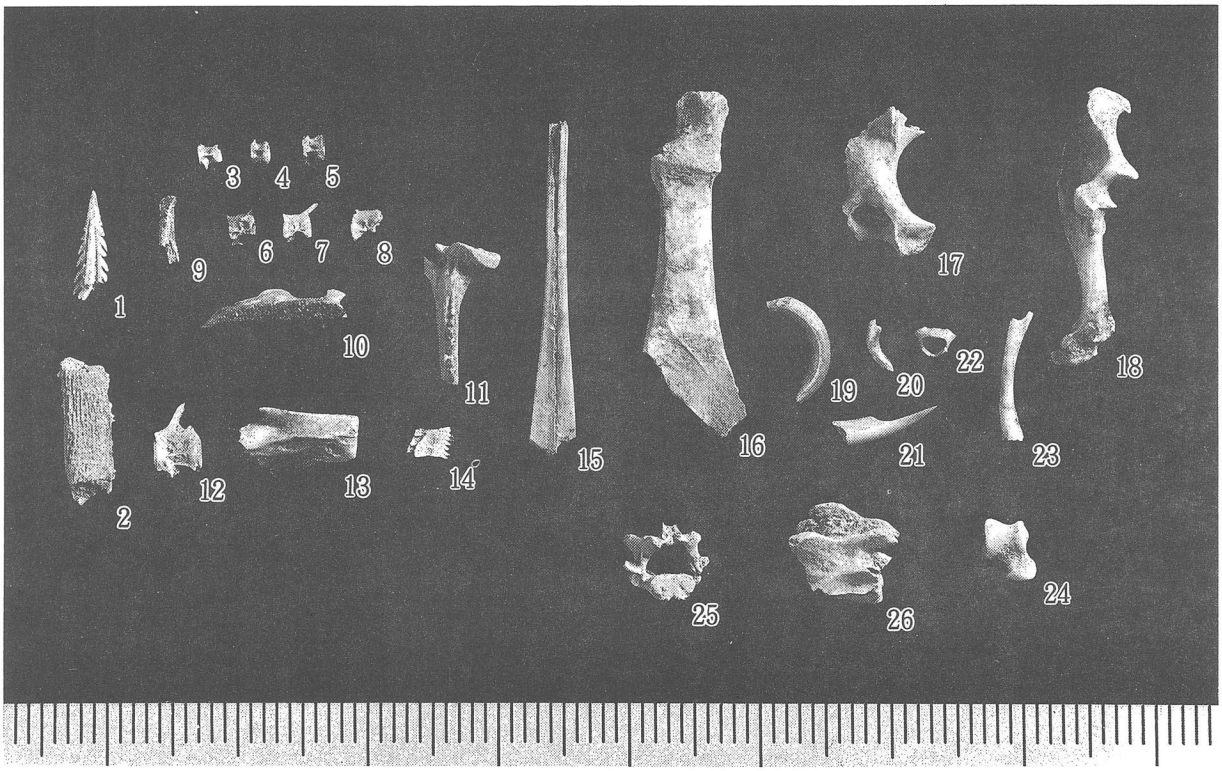
Ｐ－５８：魚骨、鱗のまとまった出土である。魚にはイワシ類、ボラ、スズキ、マダイ、アジの骨と鱗が多かった。それぞれの骨が１、２匹から多くて５、６匹が残され、またタイなども小さい個体であった。おおくの鱗といっしょに出土するところをみるとこの場所で鱗を剥ぎ、調理したのであろう。

近　世

ウシの大腿骨が一点出土しているが、かなり破損しているものであった。

参 考 文 献

西中川　駿：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源，系統に関する研究
— とくに日本在来種との比較 —
昭和63年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）
研究成果報告書・平成元年３月

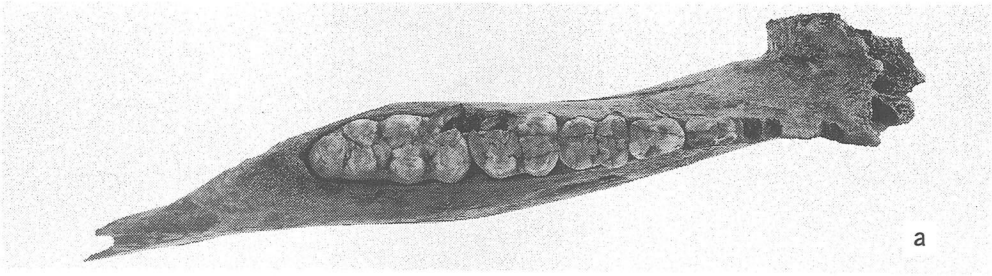


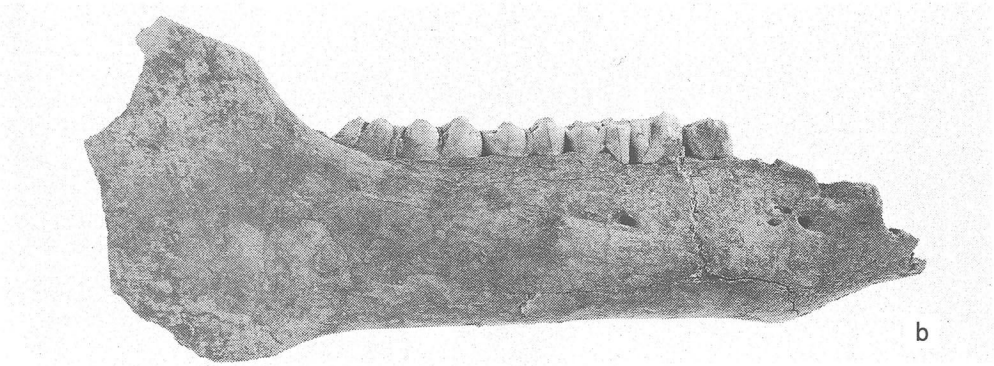
弥生期住居趾13出土動物骨

1.2 エイ類尾棘片　3～4 イワシ類椎骨　6～8 ウナギ尾椎骨　9 ウナギ鋤骨　10 ウナギ左主上顎骨
11 ギギ類左胸鰭棘　12 タイ類尾椎　13 スズキ右歯骨　14 スズキ左前鰓蓋骨片　15 タイ類血管間棘片
16 カモ類左烏口骨　17 モグラ類右上腕骨　18 モグラ類右尺骨　19 ネズミ類上顎右切歯　20 同左切歯
21 同右下顎切歯　22 同不明　23 同脛骨片　24 同右距骨　25 頸椎　26 同胸椎

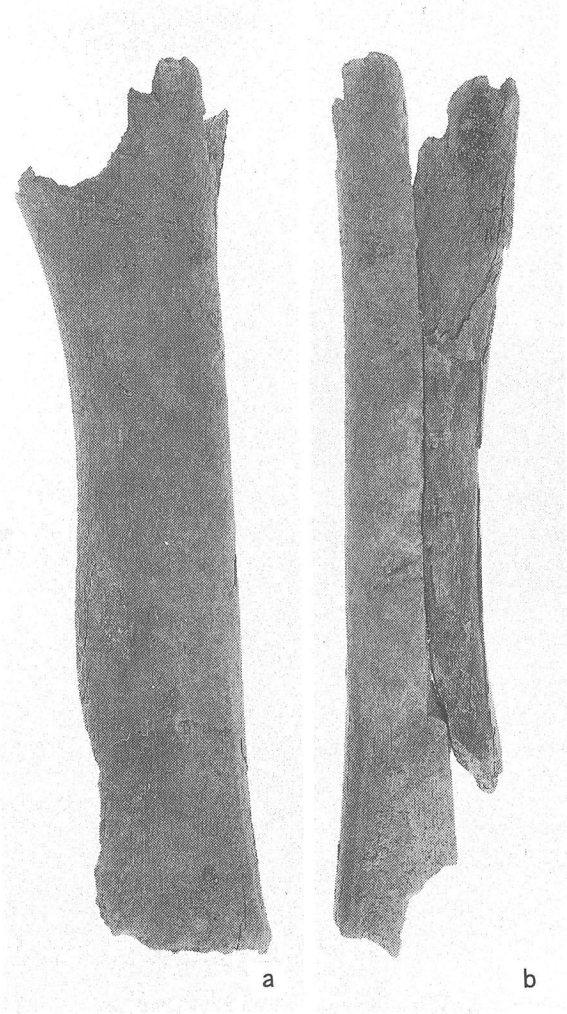
中世．P58 出土動物骨

1・2 タイ類鱗　3・4 イワシ類椎体　5 アジ尾椎体　6 ボラ尾椎体　10 スズキ腹椎　9.11.12 タイ類椎体
13 マダイ左歯骨片　14 同左前上顎骨片　15 同左上鎖骨片　16 カエル類腰椎

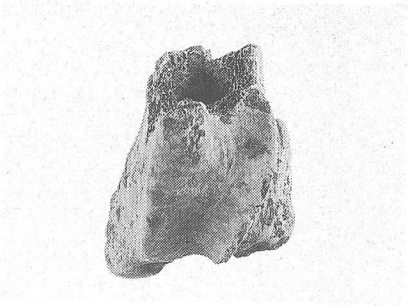




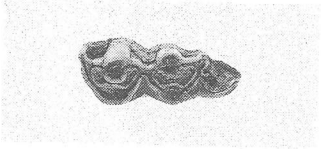
弥生期
住居址13出土　イノシシ　右下顎骨　a：咬面，b：外側面

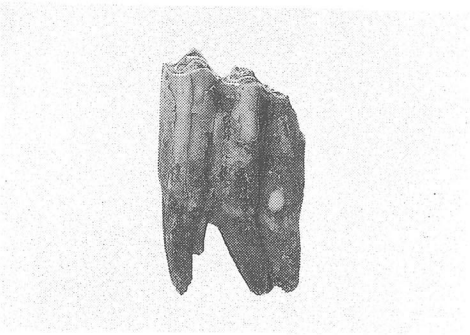


溝－14
ウシ　左大腿骨　a：正面　b：内側面

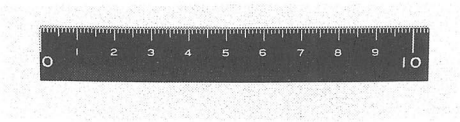


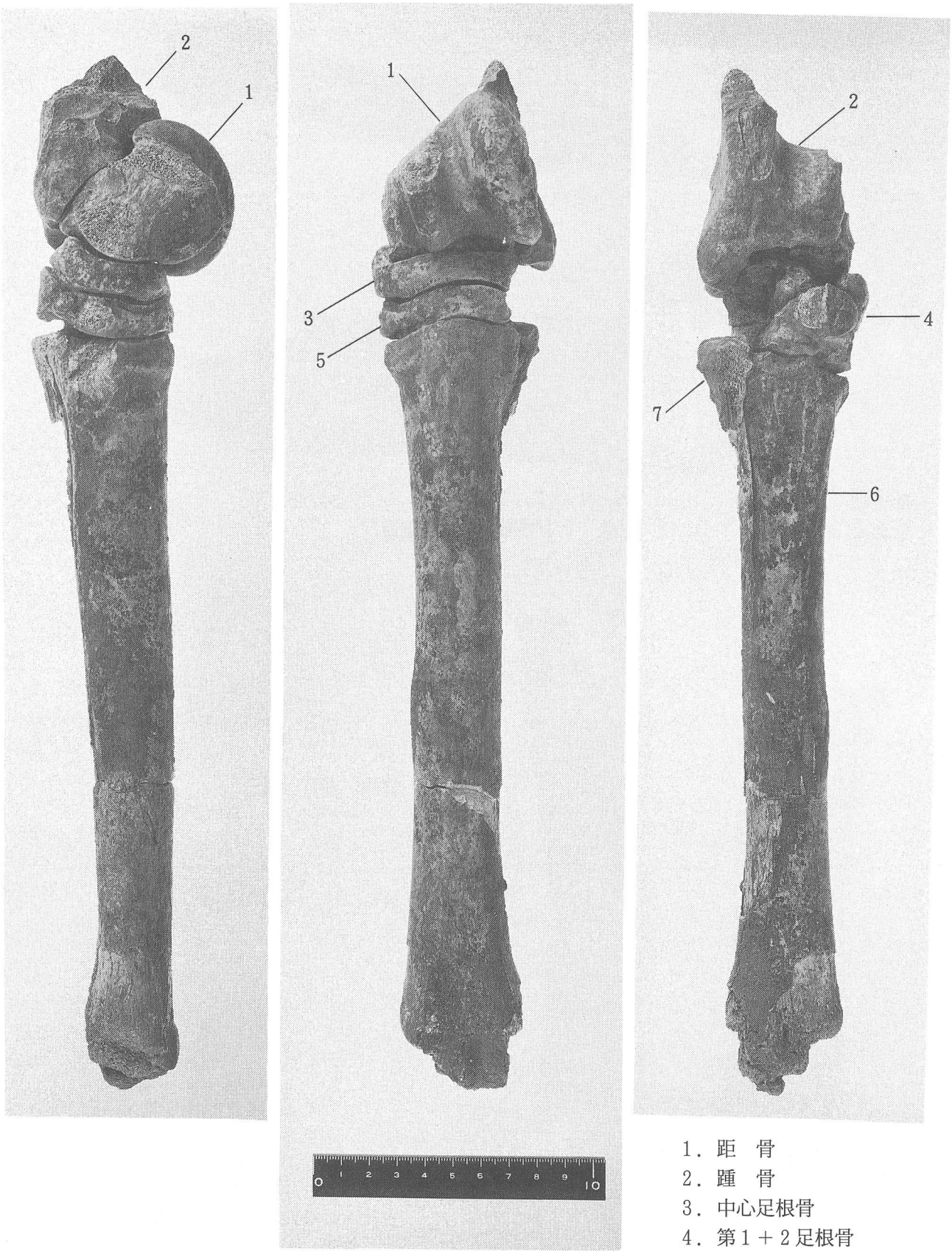
古代・奈良時代溝
ニホンジカ　左大腿骨遠位端





古代・奈良時代溝
ウマ　左M３



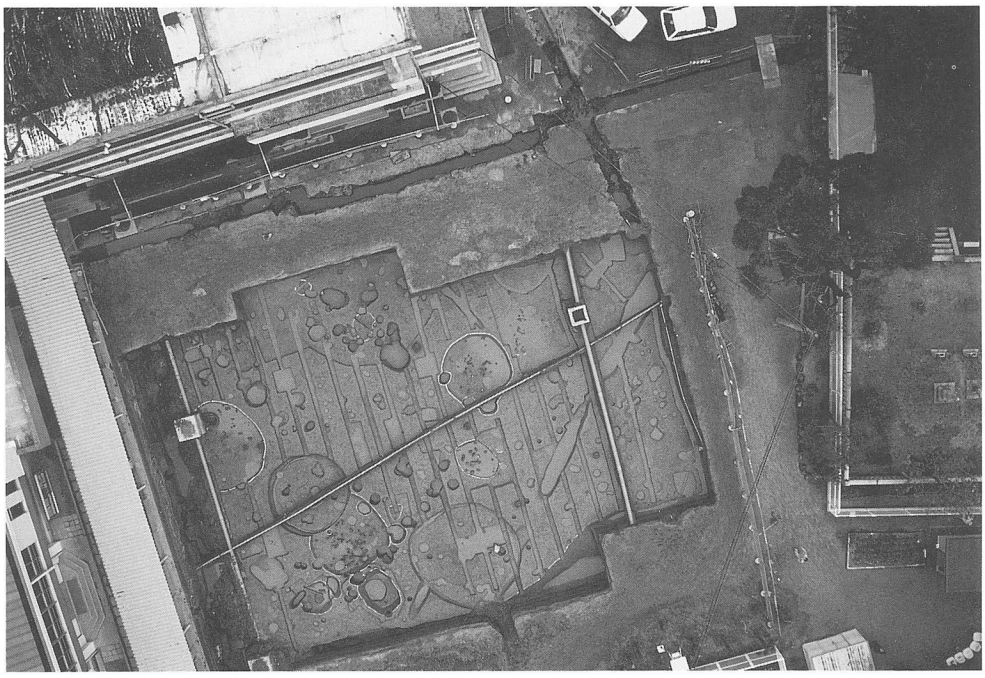


1．距　骨
2．踵　骨
3．中心足根骨
4．第１＋２足根骨
5．第３足根骨
（第４足根骨は外れている）
6．第３中足骨
7．第４中足骨

弥生期　住居趾－13出土　ウマ　左足根骨と中足骨

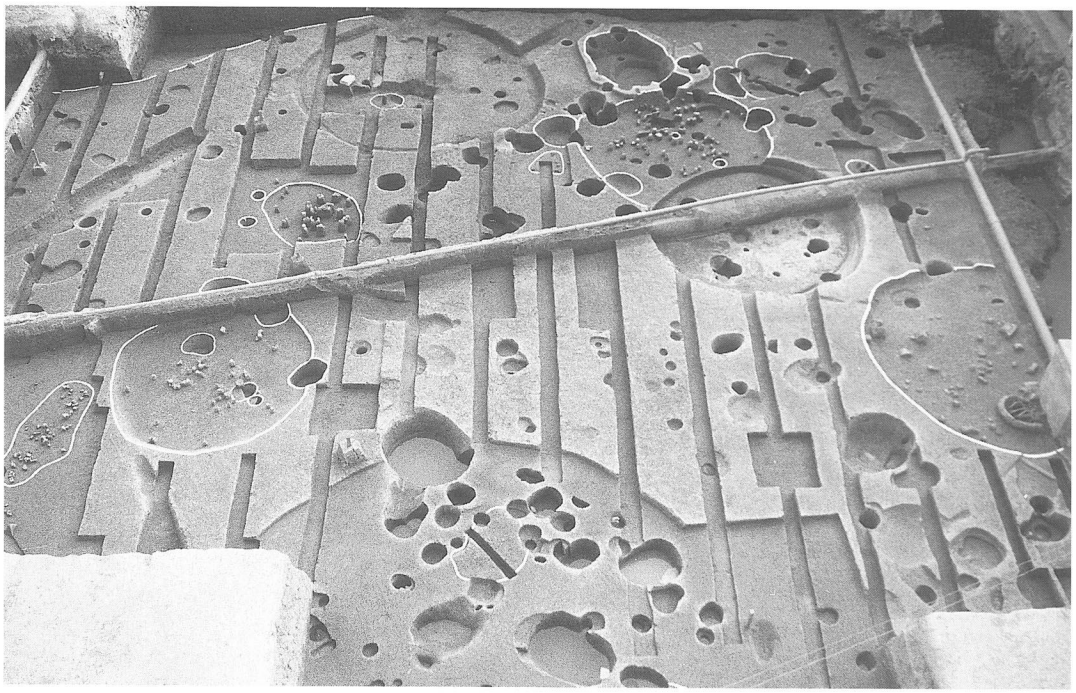
吉野口遺跡遠景
（左吉備津神社）

土層断面



晩期面空撮
（堀家純一氏提供）

図版第 2



晩期面全景

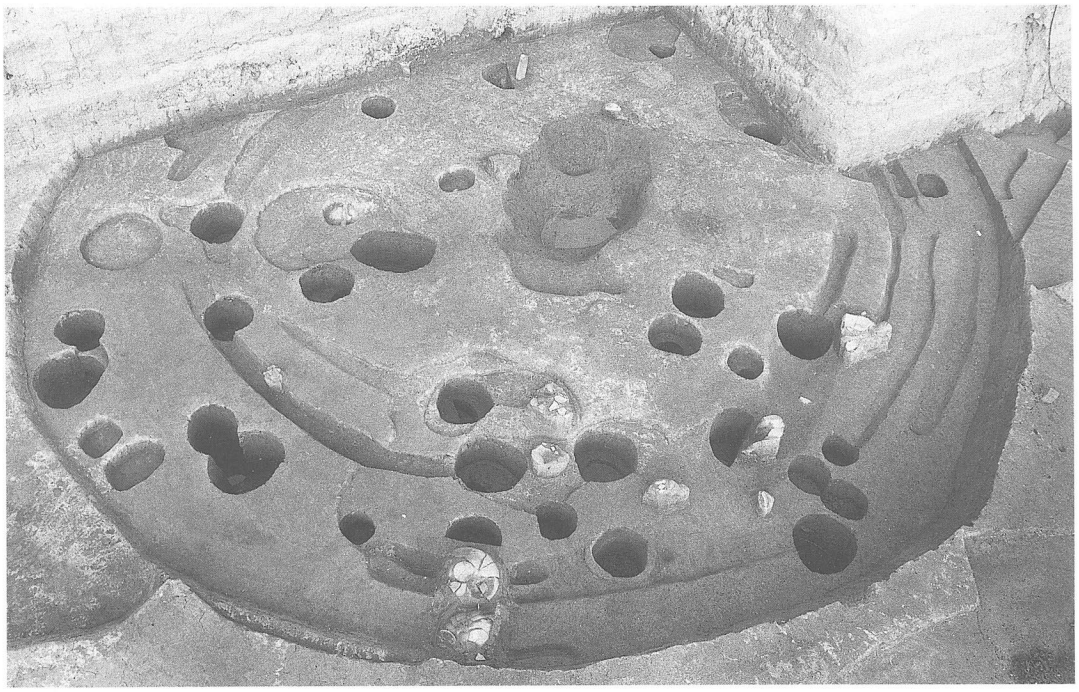
竪穴住居16

竪穴住居14

図版第 3

竪穴住居15

弥生面全景

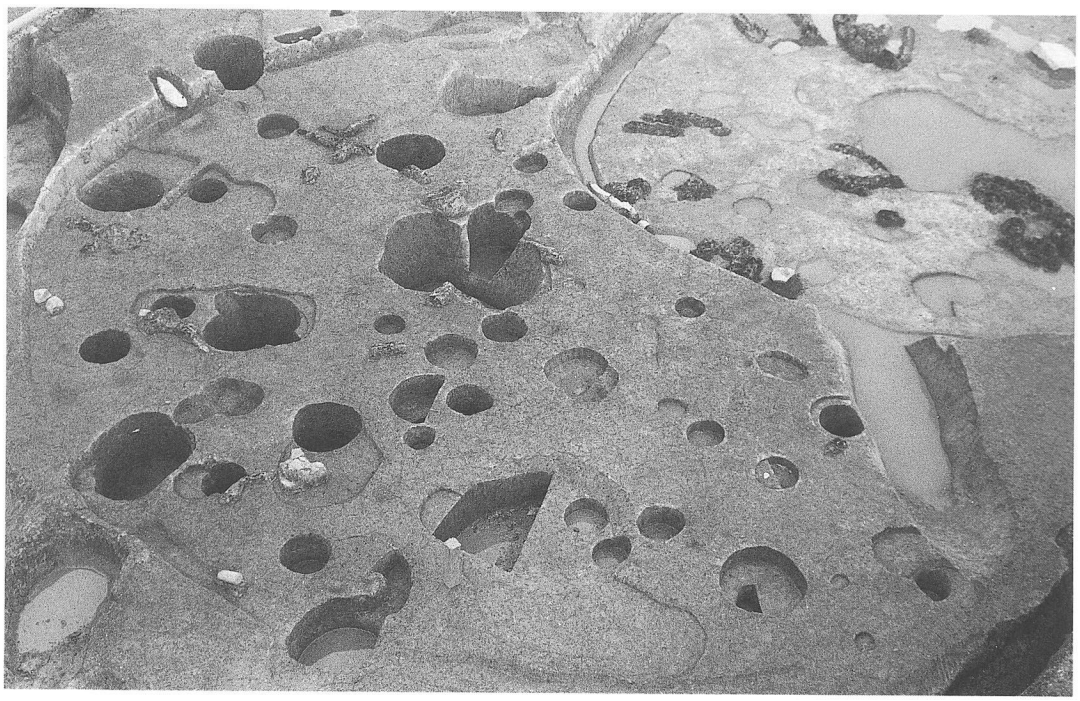


竪穴住居 3

図版第 4

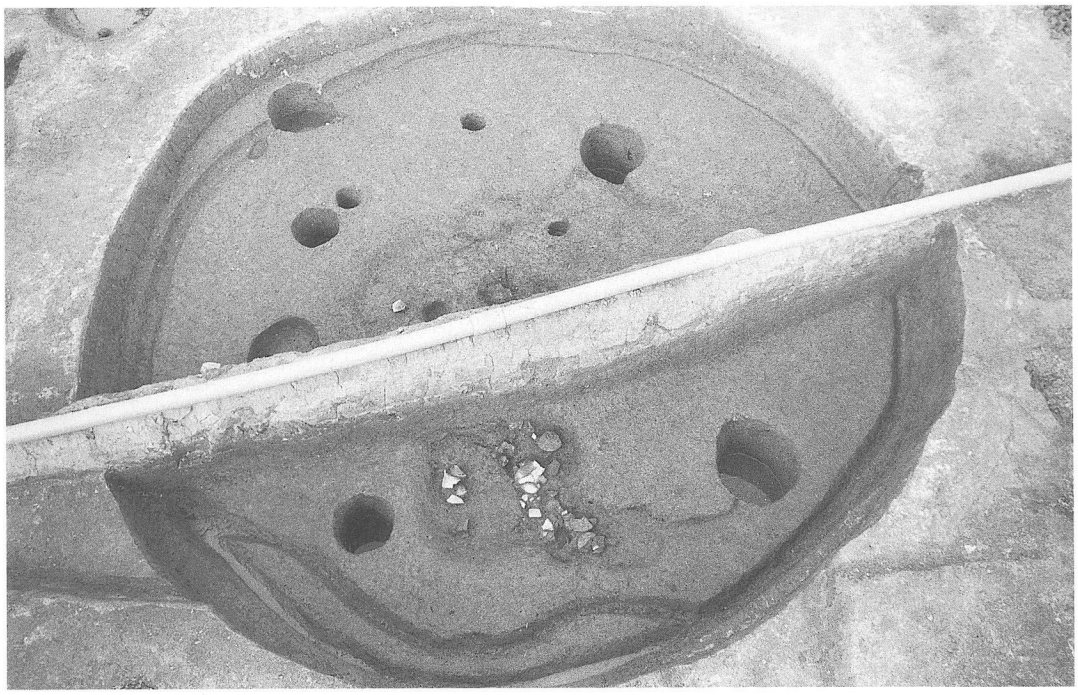
竪穴住居12
焼土検出状況

竪穴住居12

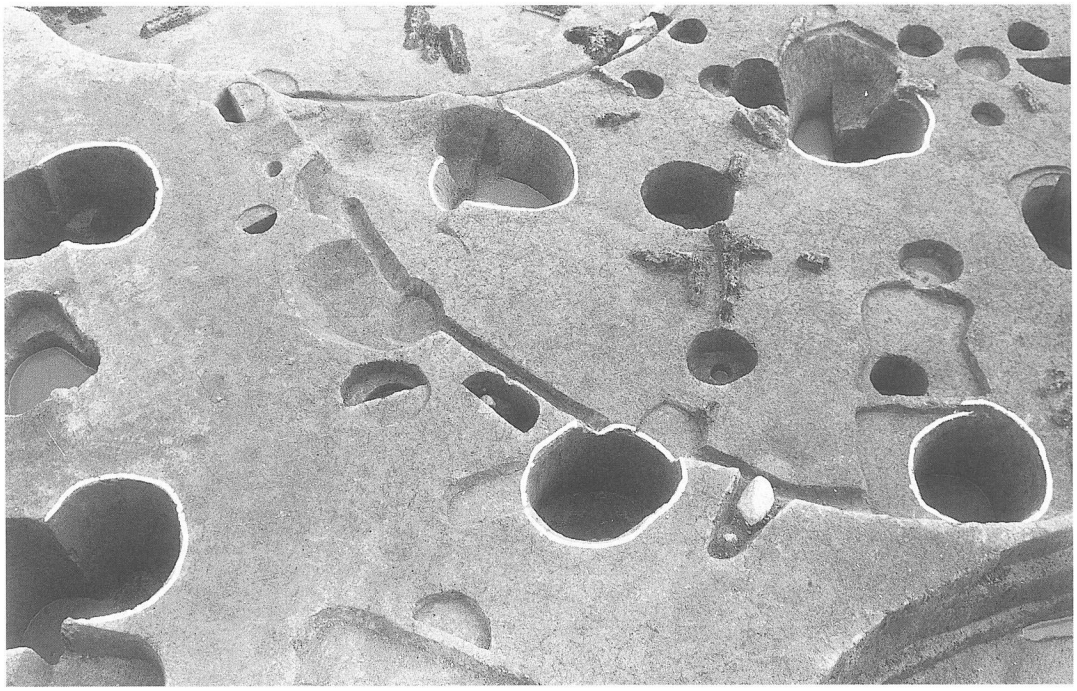


竪穴住居13

図版第 5



竪穴住居 7



建物 1

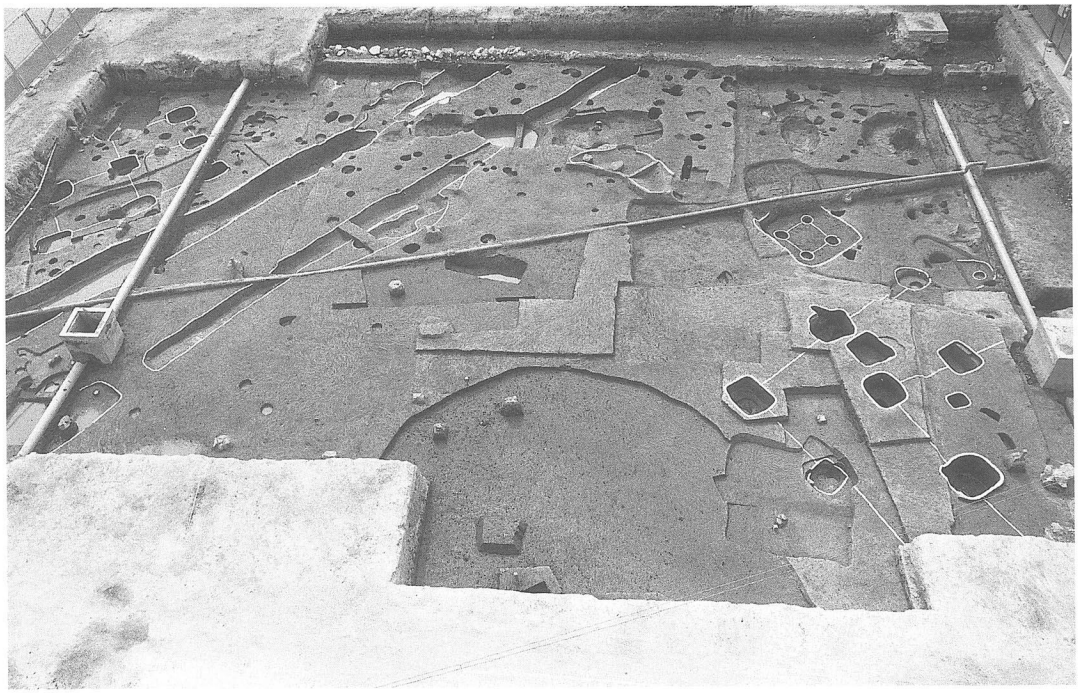
土壙墓 1

図版第 6

竪穴住居 8，9

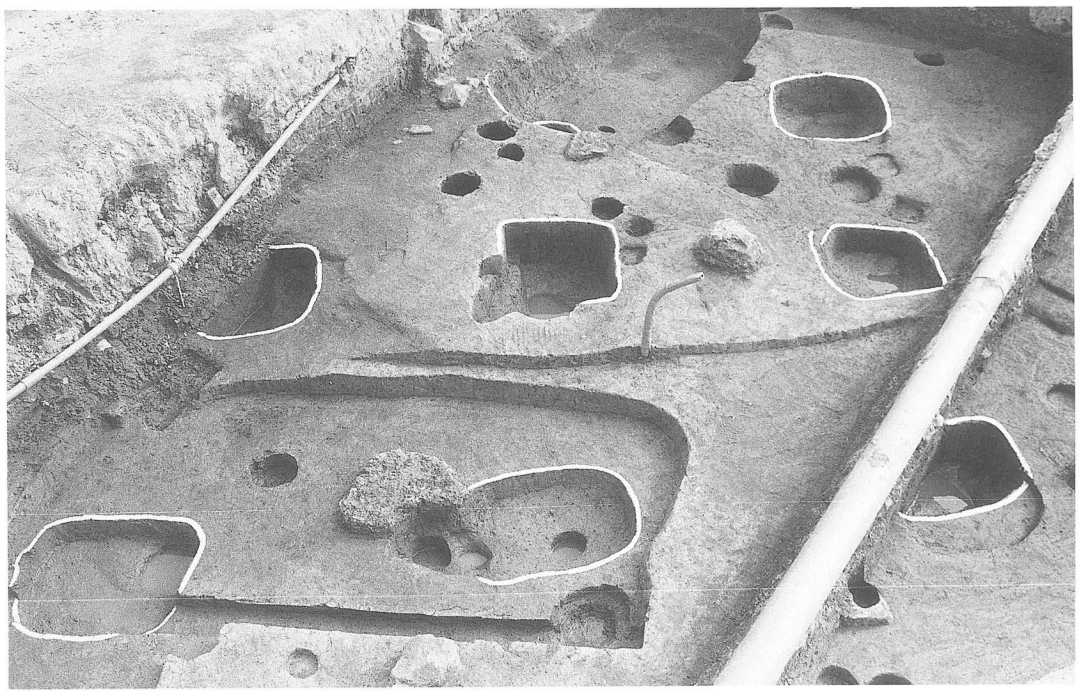
竪穴住居 2

鉄滓溜り



奈良・平安
前期面全景

建物 2，3



建物 5